東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩
No.23
2002年3月31日発行

特集・「総合的な学習の時間」への取り組み

平成14年度からの新学習指導要領の実施にそなえ、平成12年度から小中学校では「総合的な学習の時間」が設けられ、各博物館でもその対応への模索が始まっています。そこで、今回の『ミュージアム多摩』では、「『総合的な学習の時間』への取り組み」を特集テーマとし、加盟各館からの事例報告や活動方針などを紹介する場としました。また、先駆的な実践事例として知られている戸田市立郷土博物館の片貝 勝氏にご寄稿いただきました。

学校と支えあう博物館をめざして～戸田市立郷土博物館を事例に～

縄文人がやって来た！「総合的な学習の時間」への一つの試み

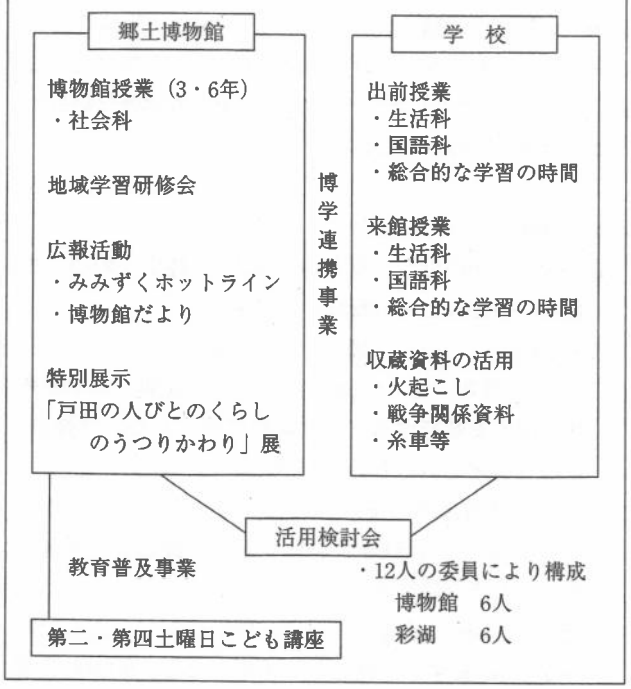
戸田市立郷土博物館指導主事　片貝　勝

1　はじめに―博物館職員のとまどい―

「総合的な学習の時間」（以下、「総合的な学習」）が試行されて数年が経過した。当郷土博物館周辺でも、「どうして、子どもたちだけで来るのだろう」「電話で子どもがアポイントをとってくる」「今までの調べ学習とはどう違うのか」など戸惑いの声が聞こえてくる。

当館では、これまでも博学連携事業を推進してきた（図1参照）。しかし、上のような声から、平成14年4月から新設される「総合的な学習」への対応が、従来の組織と方法においては、必ずしも十分ではなかったと考えられる。

図1　戸田市立郷土博物館と学校との関係図



そこで以下、「総合的な学習」に対する博物館の関わりについて、「事前に理解しておくこと」「実践事例」「課題」という三つの観点から論じるものである。

2　事前に理解しておくこと

(1)教師と博物館職員の意識改革を

従来の博物館の教育普及事業が低調に終わっている根本的理由を、宇都宮大学の廣瀬隆人氏は、「学芸員の教育普及に対する軽視と負担意識、学校教員の博物館や社会教育に対する見識のなさや独善的歴史観という相互の閉鎖性が作用した歴史的遺産である」と明確に指摘している[1]。

「総合的な学習」は、平成14年度から創設される新しい学びの時間である。教科書もなく、教えるべき内容も明示されていない。したがって、指導する教師には従来の授業観、指導観の大転換が求められている。そこで、教師とともに「総合的な学習」の指導にあたる博物館職員にまず求められるのは、廣瀬氏の指摘するように、意識を変革し「総合的な学習」について全職員で共通理解をはかることであろう。

(2)「総合的な学習」とはどんな時間か
―博物館職員の立場から理解すべきこと―

現在進行している教育改革の究極のねらいは、「ゆとり

の中で生きる力」を子どもたちに育むことである。そして、ねらいの実現のために中心的な役割を期待されているのが「総合的な学習」である。これは、学校の年間総授業時間の1/9、約100時間設定されている。体験学習や調べ学習が重視され、子どもたちはこれらの学習をとおして、自ら考え、自ら判断する力や課題を見つける力などを育み、学び方を学び、将来に生かしていくことが期待されている。

文部科学省の嶋野道弘氏は、「総合的な学習」の特徴を「大人がとった魚を子どもに与えるのではなく、釣りざおを持って自ら魚をとることができるようにすること」とたとえている。また、この学習の子どもたちへの対応として、「子どもたちに『自分たちで気づかせ、つかませる』ことに最大の注意が払われている」という草加市高砂小学校の実践例を紹介している[2]。

(3)教師と博物館職員が総合的な学習の授業を創る

博物館資料（人、もの）を活用して授業を創る場合、「博物館ならでは」の、「総合的な学習の趣旨」を生かした学びを創りたいものである。そのための留意点は以下のとおりであると考えている[3]。

①学校側からの授業の狙いをよく聞き、博物館側で実物資料や復元品を用意する。

②授業案作成には学芸員も加わり、学芸員が参加できる場面を設定する。学校が所在する地域の教材を取り入れる。

③実物資料に触る、縄文語を聞く、石器で魚を切る、火おこしをするなど体験学習を必ず取り入れ、五感に訴える。

④最新の研究成果をもとに、問題解決学習として、自然や人間の共生や地球との付き合い方を考えさせる。

⑤子どもたちの実態をよく把握しておく。（どんな体験学習をしてきたか、事前の知識・理解はどこまでか、興味・関心はどうか、発達段階など）

3　実践事例「縄文人がやってきた！」
—川口市立西中学校への出前授業—

当館では、博物館の資料（人、もの）を学校の授業で活用できるよう、博物館職員が資料を持って学校を訪問する「出前授業」を実施している。そこで次に、当館で平成13年10月25日（木）と30日（火）の2日間にわたっておこなった、川口市立西中学校への出前授業を紹介したい。

(1)単元名

縄文人の知恵や技術を体験的に学ぼう

(2)授業のねらい、指導者の願い

写真1　出前授業のようす

子どもたちにとって遠い過去の世界に想いを馳せることはとても楽しい事である。まして、現在の生活が数千年の時空を超えて古代人と結びついていることが実感できたなら、その想いはいっそう深まり、歴史に対する興味・関心が喚起されるに違いない。歴史を学ぶ目的は、単に歴史的事実を知ることばかりではなく、その背景に、昔の人々の生活や願いがあるということや、よりよい生活をめざして懸命に生きた姿があることを理解するとともに、その先人達の知恵や技術、努力や苦労を体感することをとおして、自らの生き方に生かしていくという意欲や態度を育んでいくことにある。

本時の授業は、地域の縄文時代の生活に焦点をあて、博物館資料（人、もの）を活用して、教師とのティームティーチングを試みたものである。始めに、博物館資料の提示やVTRの視聴により、子どもたちの、地域に対する興味・関心を喚起する。次に「火おこし」と「まが玉づくり」を行い、古代人の知恵と技術を体験的に学ぶ。さらに、石斧による栗の木の伐採や黒曜石による切断実験をとおして、学習を深めていく。そして、生徒ひとり一人が「楽しかった」だけでなく、「自分でも調べてみよう」「やってみよう」という具合に、今後の学習に結びつくような授業をめざしたい。

(3)学習過程とポイント

①生徒たちとの出会いを劇的に演出。「縄文人の姿」で登場。子どもたちの意識を揺さぶる。

②博物館資料の提示（縄文土器、土偶、埴輪、まが玉、石斧）。授業の導入段階として、本時授業に対する興味・関心を喚起する。縄文時代にそぐわない埴輪を、ひとつ混ぜているところがポイント。

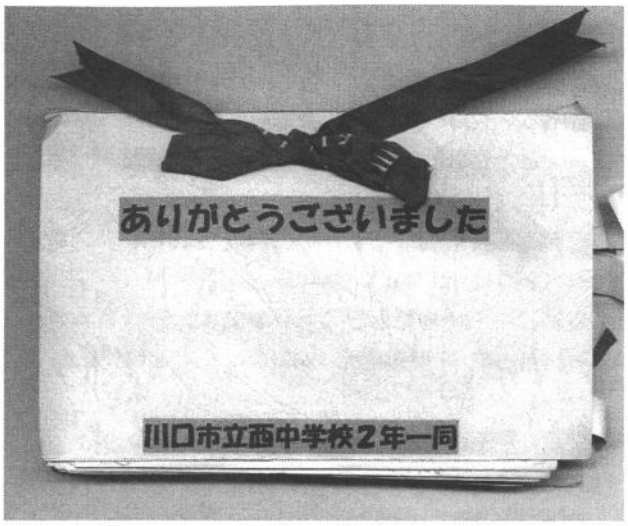
③本時の学習課題の提示「縄文人の知恵や技術を体験的に学ぼう」。体験学習を取り入れた課題解決学習であることを示唆する。

④発問1「約5000年前、当地に人間が住んでいたのだろうか？」。まず、生徒たちに予想させる。90%の生徒

は「いなかった」と予想。

⑤VTR「戸田の歴史」で検証する。戸田市文化会館建設時に約6000年前の人骨が発見された場面に的をしぼる。約3分。（大部分の生徒の予想に反する）

⑥グループで「火おこし」「まが玉づくり」に挑戦。約15分。うまくできることや、完成させることが目的ではない。ワークシートに「うまくできたところ」「うまくできなかったところ」を記入させる。「火おこし」では意図的に「きりもみ式」と「紐切り式」でやらせる。煙が出れば上出来である。「きりもみ式」だと煙さえ出ないので生徒は苦労する。ここで苦労させるところが大切である。



資料1「ありがとうございました」川口市立西中学校2年一同

⑦途中でも作業を中止させ、縄文人が教室の中央で「舞い切り」式で「火おこし」の模範を見せる。煙だけでなく火の粉までおこせるように準備・リハーサルすることがポイント。ここで生徒からは感嘆の声が上がる。

⑧発問2「縄文人が太さ30cmの栗の木を石斧で切り倒すのにどのくらい時間がかかったのだろうか？」。生徒たちに予想させる。大部分の生徒は1時間以上と予想する。

⑨VTR「NHKスペシャル『日本人はどこから来たか』」で検証。都立大学の山田助教授の石斧による伐採実験の場面に焦点をしぼる。約5分。（またしても大部分の生徒の予想ははずれた。生徒が「おや」と疑問に思う、「え～」と驚くような場面を授業中に作っていけるかがポイント）

⑩黒曜石による紙の切断実験は見本を示す程度にとどめる。

⑪体験学習は事後指導がポイント。歴史新聞や感想文集など記録を残し（資料1・2参照）、発表の場を設定するなど、評価の観点から授業のまとめをすることが大切である。

みみずく
ホットライン
～郷土博物館　と学校を結ぶ～
図書館

発行　戸田市立郷土博物館
図書館
TEL　(442) 2800
平成13年　11月　第74号

縄文人　川口西中へ行く
― 驚く心こそ知的精神の根源 ―

縄文人がやって来た

はじめ縄文人に会った時、なにをやるのかなあとワクワクした。ビデオを見たり、火起こしやまが玉作りの体験をした。火起こしは、なかなか火がつかなくて大変だった。（２年５組　石塚　佐智）

授業づくり―３つのこだわり―

上の文は、さる１０月２５日（木）と３０日（火）の２日間にわたって、川口市「地域ふれあいスクールプラン」の講師として、川口西中学校で行った授業の感想です。

まさに、「一期一会」の授業です。出かける前に、３つの視点から考えました。

その１（子どもの実態）‥‥西中生は小学校時代に、ほとんど「火おこし」や「まが玉づくり」の経験が無い。

その２（教師の願い）‥‥博物館の資料（人・モノ）を活用した、博物館ならではの授業をしたい。また、子どもたちに「地域の歴史について」興味・関心をもってもらいたい。

その３（授業のねらい）‥‥授業の中に、体験的な学習を取り入れて、縄文人の技術や苦労を体感させる。

やる気のメカニズム‥‥せっかくの授業です。どうしたら子どもたちに意欲をもたせることができるか。教育心理学からのアドバイス。「学習への意欲をかきたてるには『他人に認められたい』などの外的な動機よりも、『中味が面白い』『自分を磨えられる』『役に立つ』といった内的動機が有効とされる。」（平成１３年６月２５日付　読売新聞）

授業の実際‥‥このようなことを考えて、授業に臨みました。テーマは「縄文人の知恵と技術を体験的に学ぶ」です。「縄文人の姿で登場」子どもたちの意識を揺さぶります。「土器、埴輪、土偶、石斧などの資料の持ち込み」「黒曜石による紙切り実験」臨場感を出します。「火おこしとまが玉づくり」体験学習です。

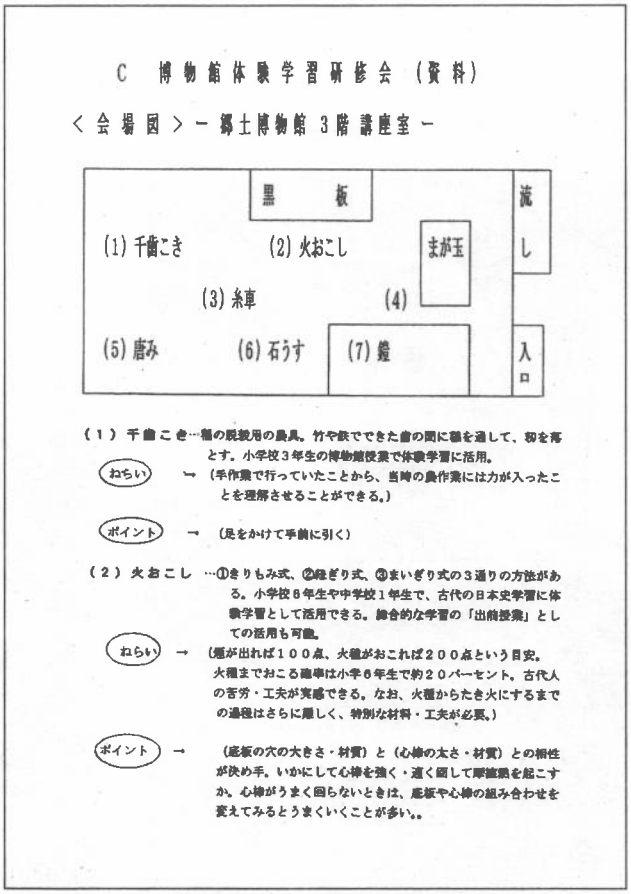
子どもの変容‥‥この前は、縄文時代の人々の生活について、詳しい説明や、火おこし、まが玉づくりなどの体験をさせていただき、ありがとうございました。おかげで、縄文人、縄文時代について関心が深まりました。（２年４組　渡部　瞳）

はじめて視聴覚室に入ってきたと思ったら、見たことも無い格好で本当にびっくりしました。話もすごくおもしろくて、人間の昔の歴史について、さらに興味を持ちました。（２年４組　山崎　彩花）

縄文人は今日もいく‥‥　「人間にとって、遊び心ほど大事なものはない。‥人間の精神的自由の根源に遊び心に隠れている。」「驚く心こそ知的精神の根源」（大田　堯　東京大学名誉教授）の言葉に励まされ、縄文人は今日も学校を訪問します。

雑もみ式で火が起きるかな？

資料2　博物館広報誌「みみずくホットライン」平成13年11月号



C　博物館体験学習研修会（資料）

＜会場図＞－郷土博物館３階講座室－

（１）千歯こき…稲の脱穀用の農具。竹や鉄でできた櫛の間に稲を通して、籾を落とす。小学校３年生の博物館授業で体験学習に活用。

ねらい → （手作業で行っていたことから、当時の農作業には力が入ったことを理解させることができる。）

ポイント → （足をかけて手前に引く）

（２）火おこし …①きりもみ式、②紐ぎり式、③まいぎり式の３通りの方法がある。小学校６年生や中学校１年生で、古代の日本史学習に体験学習として活用できる。総合的な学習の「出前授業」としての活用も可能。

ねらい → （煙が出れば１００点、火種がおこれば２００点という目安。火種までおこる確率は小学６年生で約２０パーセント。古代人の苦労・工夫が実感できる。なお、火種からたき火にするまでの過程はさらに難しく、特別な材料・工夫が必要。）

ポイント → （底板の穴の大きさ・材質）と（心棒の太さ・材質）との相性が決め手。いかにして心棒を強く・速く回して摩擦熱を起こすか。心棒がうまく回らないときは、底板や心棒の組み合わせを変えてみるとうまくいくことが多い。。

資料3　体験学習研修会資料

4　課題―「対話と連携」を両者のキーワードに―

今後、「総合的な学習」に取り組んでいく際、どのような課題が考えられるか、最後に若干の考察をおこなうこととしたい。

まず、博物館が取り組むべき課題として、学習指導要領や教育課程について基本的な知識を持つことが挙げられる。特に「総合的な学習」については、博物館職員間で研修会をもつ必要があるだろう。また、授業で活用できる博物館資料の紹介と、それらの資料を活用した実践事例の紹介・普及も求められる。さらに、博物館授業等をとおして、子どもたちの実態把握に努め、それを展示解説や体験学習の指導に生かすことも課題として挙げられるだろう。

「総合的な学習」を指導するための、教師向けの研修会を実施することも必要であると考えられる。なお、当館では、「体験学習指導者研修会」（資料3参照）を実施しており、市内小中学校の教師を対象に、千歯こき、火おこし、糸車、まが玉、唐箕、石臼、鎧についての使い方や、授業での活用方法についての講義と実習をおこなっている（写真2・3参照）。

また当館では、市内の小・中学校の教諭・近隣博物館の関係者等を対象にした「博学連携を考える研修会」を実施している。この研修会の内容は、博物館教育に関する講演会、博物館活用を推進している教師による実践事例の報告をはじめ、常設展示室の内覧会や収蔵資料室の見学、収蔵資料室の見学などである。また、別の機会に市内の施設や文化財めぐりなどもおこなっている。

一方、教師側も、常設展示室の資料に関する知識を習得していく必要があるし、体験用資料の実技研修もみずからすすんで取り組んでいく姿勢をもつことが課題となるだろう。

いずれにせよ、学校と博物館とが、お互いに役割分担を明確にしつつ、学習の場や活動において両者の専門性を生かし、足りないところを補完し合いながら一体となって子どもたちの教育に取り組むことこそ求められているのではないだろうか。

注

(1)廣瀬隆人「学校教育と『融合』する博物館活動」（博物館と学校をむすぶ研究会『学ぶ心を育てる博物館―「総合的な学習の時間」への最新実践例』ミュゼ、2000年）

(2)嶋野道弘『総合的な学習の時間―実践へのアプローチ』全国教育新聞社、2000年

(3)長島雄一「博物館と学校」（『季刊ミュージアムデータ』No.52、丹青研究所、2001年）をもとに作成。

参考文献（戸田市立郷土博物館発行資料）

『魅力ある授業づくりは郷土博物館から―郷土博物館活用の手引書Ⅱ』1997年

『改訂版学習サポート―小学校3年生用・小学校6年生用・中学生用』1998年

『博物館を活用した実践事例集』2000年

博物館広報パンフレット『みみずくほっとらいん』（毎月発行）

写真2　鎧の試着

写真3　糸車

たまたま「総合学習」という名前で

府中市郷土の森博物館

「総合学習」はある日突然、博物館を襲ったわけではない。正式導入を控え前倒しで実施している学校が多く、博物館で「総合学習」の言葉が聞かれたのは2、3年前であろうか。状況を察知して、学校との連携を事業重点項目の1条に加えたのが、00年度の当館事業計画書から。もっともその間、教育委員会側から博物館に対してそのための要請があったり、体制整備が図られたりしたわけではない。「総合学習」の言葉は電話をしてきた学校の先生から初めて博物館に飛び込んで来たのかも知れない。

展示解説員による解説付きの学校団体だけで年間70数件、延べ6,000人近くを受け入れてきた当館でも、01年からは「総合学習」名目で訪れる児童･生徒の件数は確かに増えた。内容はさまざまだが（下表参照）、要するに、単に展示を見たり解説を聞いたりするのではなく、博物館資料やスタッフとの直接の接触、ユニークなテーマ設定、子供の自主性やグループ行動に重点を置いたものが多い。事前に担当教員と博物館側との調整がなされ、両者の主旨と希望が適ったプログラムになるのが好ましいが、不充分なことは承知している。対応するスタッフの体制も厳しいが、ちょうど00年度に制度化した博物館ボランティアの活躍がめざましい。市内の学校優先はいたしかたないところか。「総合学習」を名目にした市内の学校20名以下の利用は、入館料を免除する規定も整えた。

「総合学習」のすべてが博物館と結びつく必要は全くないが、その主旨からして、地域の博物館がその一翼を担うことは、公平に見て望ましいことのように思う。学校受け入れは、手間ひまがかかることだが、お金はそうかからない。予算のない今の時期だからこそできることであろう。多額の公金を使ったイベントよりも大方の共鳴が得られるのではないか。子供は継続的で再生産が可能な市場でもある。

しかしそれよりも何よりも、「総合学習」受け入れスタイルを切磋琢磨していくことにより、地域博物館の本来的な姿に立ち戻れるのではないか、ということである。その教育プログラム作成に教師ばかりではなく、子供やボランティアの参画する余地があるのもいい。翻って考えるに、博物館としてあたりまえの教育活動が、たまたま「総合学習」という名前を借りてやってきたといってもいいくらいである。しかも、そのための児童生徒への対応と、一般利用者に対するサービスと、実のところさほど変わるところがないのではないか、とも思う。あの奔放でしかも優れた感性の利用者にわれわれが学ぶことは多いはずである。

総合学習受入実績（2001年1月～12月）

月日	学年	人数	内　容	対　応
01/25	中1	5	職場訪問	学芸係
02/03	小4	101	水車見学・石臼粉挽き体験	学芸係・ボランティア
02/09	中1	5	職場体験	解説員・学芸係・庶務係
02/16	小4	108	石臼粉挽き体験	学芸係・ボランティア
02/27	小3	70	石臼粉挽き体験	学芸係・ボランティア
05/10	高1	329	地域研究オリエンテーション講演会	学芸員派遣
09/12	中1	14	わが町で学ぼう・江戸時代の府中	解説員・学芸係
09/14	中2	8	職場訪問研究・ものの行方	学芸係
09/24	小3	3	府中いいとこ発見・郷土の森	解説員・学芸係
09/27	小3	111	府中いいとこ発見・くらやみ祭	解説員
10/25	小6	16	地域の歴史を学ぼう・甲州街道	解説員・学芸係
10/25	中1	2	職場体験	解説員・学芸係・庶務係
10/29	小5	7	地域の歴史を調べよう・武蔵台遺跡	学芸係
11/07	小5	7	お米探検隊	解説員・学芸係
11/21	小5	66	お米の脱穀体験	資料貸出・指導
12/11	小4	56	多摩川の楽しみ方	解説員
12/12	小4	71	お米の脱穀・籾摺り体験	学芸係

楽しく広がれ総合的な学習

東大和市立郷土博物館

総合的な学習の時間の実施に伴い、受け入れ側となる博物館の対応が課題とされていますが、当郷土博物館では、ことさらに「総合のため」の対策は講じていません。それは、総合であるか否かにかかわらず、学校側からの相談に対してできる限りの協力、援助、指導を行う、という基本スタンスは、これまでと何ら変わらないと考えるからです。博物館が考えた総合用プログラムを学校に与えるのではなく、学校の意向を尊重しながら“博物館ができること”という制約の中で協力しようと考えているのです。

学校と博物館がどちらか一方的に立場を押しつけることなく、子供にとってわかりやすい授業を双方で模索することになります。

その一つの事例として、平成13年度に市立第一小学校の5年生の総合的な学習において、教員と館職員が知恵を出し合い、年間を通して継続している授業を紹介します。

＊　＊

「自然の中での体験は１回限りでなく、少なくとも四季を通じて博物館の方に来ていただけませんか？」と先生にお話ししました。その結果、ほぼ毎月１回、狭山丘陵、博物館、学校の教室のいずれかで狭山丘陵の自然について総合的な学習を行なうことになりました。

狭山丘陵の雑木林で植物、昆虫、野鳥の観察、ドングリ、落ち葉、マツボックリなど自然の材料を使っての工作。3月には学習した内容を、子供たちが雑木林でグループごとに発表します。お客さんは保護者の方や、地域の皆さん、他の学年の子供たちです。ミニ観察会、ネイチャーゲーム、紙芝居、森の音楽会など…。子供たちが学習した成果をどんなふうに発表するか、楽しみにしています。また、博物館ロビーでも1年間の活動の様子を展示する予定です。

総合的な学習は、基礎科目を応用して学習していくものです。国語・算数・理科・社会・音楽・体育・図工の基礎科目がしっかりできていて、総合的につながっていくのではないでしょうか？そのため、単なる体験や、調べ学習だけで終わってしまっては、いけないと思います。

例えば、野鳥について学習をするとしたら次のようなことが考えられます。鳥についての物語を読む・作る、渡り鳥の地図を作る、食べ物と栄養、市の鳥・学校の鳥を決める、巣箱作り、鳥による農業被害、鳥の歌を作る・歌う、鳥の大きさ・重さをはかる、飛ぶ速さと同じ速さで走ってみる、鳥の習性と生き物同士のつながりなど…。他にもいろいろなことが考えられます。

鳥についての学習というと、理科的な要素と思われがちです。しかし、いくつもの教科にまたがって学習したいものです。鳥を主人公にした物語を子供たちが作り、演劇を開くのもおもしろいでしょう。演劇会を開くための準備やポスター作り、当日の運営まで子供たちが主体となって取り組めれば、素晴らしいと思います。

総合的な学習は、最後に発表をして終わるということが多いようです。総合的な学習の目的からいっても、その学習を踏まえて今後どのようにそれを活かしていきたいか、その変化まで考えさせることが大切ではないでしょうか。

私たちの実践している学習内容は、ほかの博物館や学校でも取り組んでいることで、別に目新しいこともないでしょう。私たちの取り組みで特徴的なことは、①常に学校の先生と博物館職員がお互いに行き来し、情報交換をしている。②年間計画を体系的に決めた。③お父さん、お母さん方、市民ボランティアグループの協力を得られる、が挙げられます。

＊　＊

学校からの依頼は、単発で終わってしまうことが多いのですが、年間計画として依頼を受けた方が、私たち博物館職員も学校の先生方も、何より子供たちも楽しく学習できるでしょう。

総合的な学習をどのように進めていくかは、先生の学級作りと考えがとても大きく関係してきます。私たち博物館職員は、講師依頼を受ける時は、子供たちの学習と先生方のお手伝いができたらと思います。

今後、子供たちが体験の中から、自ら課題を見つけ取り組み、どんな活動に結び付けていくか、総合的な学習はどんどん広がっていくはずです。

地域と博物館の連携

清瀬市郷土博物館

ここ一、二年の状況を見ていると、学校現場の先生方も色々と模索しておられるようですし、博物館としても、郷土文化の学習を積極的に援助していかなければならないと実感しております。

当市の社会教育課では、平成2年から市民サークルや指導者情報などを掲載した「まなびすと」というパンフレットを作成しています。これは生涯学習推進のための市民向け手引き書とでもいうべきものですが、博物館でも同様に、歴史・民俗などの郷土学習のみならず、自然科学や社会学的学習のための手引書を作成していかなければならないでしょう。

例えば、博物館では郷土の文化や歴史に詳しい方、郷土料理が得意な方、伝統技術を持っている方、野草や野鳥に詳しい方などさまざまな技能を持っている市民の情報を持っています。現に、学校からは子供たちに郷土文化などを教えてくださる方を紹介してほしいという要望がたびたびあり、学校と市民とを結ぶ橋渡し的な役割が求められています。従来は、その都度博物館があいだに立ち双方の都合を調整しており、非常に効率の悪い方法で対処していましたので、学校の教員に向けて手引書などの形で情報を提供できれば、選択肢も広がり迅速かつ十分な対応もしていただけるのではないかと期待します。しかし、現状では情報が体系的に集約されていないこと、追跡調査をしていない情報があるなど整備不全の状態なので、学校現場で活用できるよう早急に形にしなければなりません。また、指導者や講師の情報だけでなく、子供たちに向けて市内探検マップや検索項目が豊富な清瀬事典などを作成したら楽しんでもらえるだろうかと考えております。

こども体験教室「柏もちを作ろう」伝承スタジオにて

また、当館で従来から行ってきたさまざまな体験学習の事業は、学校現場に即応できるものと考えます。例えば、民具など実物の資料を用いて農作業をする、郷土料理を作る、藁細工をするなどの事業は学校では出来ない学習です。「伝承スタジオ」というあまり冷暖房の効かない体験施設で、みんなで苦労しながら作業をしたり、一つのものを作り上げたりすることは、言葉だけでは伝えきれない多くの事柄を子供たちに示唆することになります。食べ物ひとつ作るにしてもたくさんの工程を経て大変な労力が要ることを知ってもらえます。かまどや囲炉裏を使い、火の暖かさや煙のにおいを体感すること、道具の重さを知り、昔の人の苦労を想像することなど、どれも無駄にはならない体験でしょう。学校の先生方には博物館の施設や資料、ノウハウをぜひ活用していただきたいと思います。

昔の子供たちは家族や地域社会の人間関係の中から処世術や思いやりといったものを、また、自然界の中から生命の神秘にふれ、生と死、生命の大切さといったものを学んでいったわけですが、現代では子供たちの多くは生まれた時から身近な限られた大人、主に両親の価値観だけしか触れる機会がないのでしょう。人として不可欠な要素が十分育っているか多少疑問が残ります。

親や社会の怠慢さを全て学校現場に負わせる態度もいかがなものかと思います。何より子供たちが一番損害を被るわけですから、地域の一施設として、また一人の大人として責任を放棄することは出来ないと思います。博物館としては可能なかぎり協力していかなければならないでしょう。学校や塾での勉強のみを勉強だと限定している最近の子供たちにとっては、学校以外の場で学ぶ機会を得ることは、今後成長にともなう知恵の習得のために有意義であるはずです。

地域博物館の強みは市民の顔が見え、密なコミュニケーションを取れることです。活用されない情報では無価値なものになってしまいますが、市民・博物館・学校間のネットワークをより広げ、子供たちにどのような情報が必要なのかをすくいあげ、それに対応できる情報を市民の方からいただき提供していけば、現状に即した対応をしていけるのではないかと思います。

「総合的な学習の時間」との関わり—この一年をふりかえって—

調布市郷土博物館

学校教育との連携は、以前から様々な形で行なっており、現在は次の事業を実施しています。

①講師として学芸員が学校へ出向き、土器の作製から焼成までを行なう「縄文土器づくり」（毎年3校程度）
②学区域と関わりある資料を集めた「郷土学習室」の設置運営（現在3校）
③学校週五日制に対応し、それまで個々に実施していた「竹の玩具づくり」「わらぞうりづくり」などを再編成した「子どもはくぶつかん」の実施（第二第四土曜日年間十数回実施）

しかし「総合的な学習の時間」への取り組みは、博物館が主体的に実施するこれらの事業に比べ、学校からのアプローチを待っての対応となるため不確定な要素が多く、また実践例が少ないことも手伝って、まさに暗中模索といったところです。そこで今年度の実施例を紹介しながら今後の取り組み方について考えてみたいと思います。

今年度「総合的な学習の時間」の枠内で学校から依頼を受けた件数は5校6件で、内5件が「しめかざり」「土器づくり」などの体験学習と、子どもたちが用意した質問にこちらが答える形の勉強会でした。これら5件は博物館の立場だけでみれば、既存の事業やレクチャーを行なうのとさほど変りはなく、言わば時間的な都合が付けば対応可能な範疇でしたが、残る1件は4月からおよそ8ヶ月間ゲストティーチャーとして子どもたちの指導にあたるものでした。

ゲストティーチャーとして参加した実施例はテーマが「昔を知って今を生きる—調布発　昔へタイムスリップ—」、6年生の歴史学習に合わせ、また市域内に遺跡が多いという周辺環境の特性を生かしたテーマ選びでした。単元の流れは、遺跡見学や博物館での遺物の観察、そこから課題を引き出す。次いで小テーマごとに分かれての「調べ学習」、さらに小テーマによっては土器や石器の作製を体験し、その結果をまとめるというものでした。

この間、遺跡や博物館の見学から始まり、土器や石器作製などの指導に合計9回、さらに自主的に博物館を訪れる子どもたちもおり、かなり踏み込んだ対応になりました。この実施例の特徴は、石器作りを例にとると、単なる作り方の説明ではなく、子どもたちがある程度の石器を作り、それを使うところまでが到達点としたことです。一年間の授業時間の中で、どこまでできるのか当初は不安もありましたが、これはテーマ選びから到達点までを子どもたちが主体的に決定したこともあって、技術的な困難さを感じながらも皆熱心に取り組み、子どもたちも満足感を得ることができたのではないでしょうか。

この実施例を振り返っての課題は、やはり通常業務から如何に時間を割くか、また人数分の道具や材料を如何に調達するかなど、いわば量的な問題と、ゲストティーチャーとして限られた時間の中で目標到達までどのように指導したら良いのかなどがありました。「総合的な学習の時間」は来年度から本格実施され、博物館としても取り組む機会が増大し、基本的には当然積極的な対応を心掛けていますが、通常業務との時間的な問題が一層顕在化してくるものと思われます。

また今年度は依頼を受けた6件のほかにも「総合的な学習の時間」に関連した問い合わせがありました。そのいくつかは遺跡や史跡の見学、地層の観察が可能な場所の照会、ワラの入手先、さらに石臼など収蔵資料を実際に使用できないかなどで、そのほとんどが校外学習や体験学習に関わる内容でした。こうした問い合わせに対し、適宜対応してきましたが、時期的に適切でなかったり、資料や文化財保護の立場、また第三者への配慮など様々な理由からすべてに満足の行く答えが出せたわけではありませんでした。

以上、当館が今年度対応した事例の概略です。「総合的な学習の時間」への取り組みは博物館活動の中で重きを置かなければならない存在であり、今後の推移を見ながらさらに適切な対応を検討したいと考えています。

複合文化施設としてできること／博物館としてできること

パルテノン多摩歴史ミュージアム

■現状

パルテノン多摩歴史ミュージアムは、ホールや会議室などとの複合施設の中に組み込まれていることから、「総合的な学習の時間」への取り組みも、博物館施設単体としてではなく、どちらかといえば複合文化施設全体での対応がメインとなっている。

そのうち、もっとも多いのが職場体験で、職員へのインタビュー、施設調査などの要望も目立つ。これらについては、学校側との事前の協議により、内容によって総務課（視察窓口担当）・管理課（施設・設備担当）・学芸課（博物館部門担当）・事業課（ホール部門担当）の職員および展示解説員（委託職員）がそれぞれ分担して対応している。

一方、歴史ミュージアムにも、地域学習の一環とした団体見学およびグループ学習の来館が増えつつある。内容は、やはり小学校中学年における多摩ニュータウン開発以前の暮らしに関するものが多く、基本的には展示解説員で対応しているが、希望によっては学芸員による解説をおこなっている。まだまだ試行錯誤の段階にあるというのが現状である。

■展示での対応

歴史ミュージアム内のミニ企画展コーナーでは、年間2～4回程度のミニ企画展を実施しているが、2001年度には「ごはんが口に入るまで～植物を食物に変える脱穀具～」（2001年7月13日～12月12日）および「多摩丘陵の野鳥たち」（2001年12月15日～2002年4月15日）を実施した。これらの展示は、それぞれ小学校における地域学習への応用が可能な内容であったと考えている。

とくに「ごはんが口に入るまで」は、現行の小学校学習指導要領・社会（1998年版）における「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」（第三・第四学年）にその趣旨が合致していたことから、小学校における社会科授業での利用もいくつか見られた。しかし残念ながら、組織的・継続的な利用にはいたっておらず、今後の課題として残されている。

また、「多摩丘陵の野鳥たち」については、市内小中学校における環境教育の一環として、野鳥の営巣調査や生態調査などが実際におこなわれており、歩調をあわせて実施する可能性があったが、そこまではいたらなかった。

■今後の展望・課題

今後は、映像ソフトやCD-ROMなど、学校の教材としても使えるようなソフト制作を予定している。映像については、8本の既存のソフトがあり、すでに展示室内で上映しているが（①～⑧）、2001年度で新たに5本の映像を制作し（⑨～⑬）、多摩市内および周辺地域の小・中学校への貸出もしくは無償配布を検討している。

《映像ソフトリスト》

①多摩ニュータウンの誕生
②昔の村は
③妙子ちゃんの成長とともに
④ある家の物語
⑤こんな生活もあった
⑥多摩ニュータウンの都市づくり
⑦多摩ニュータウン―知ってますかこんなこと
⑧わたしたちの住むまち多摩ニュータウン
⑨くらしに生きる祈り～正月と盆～
⑩年中行事と子どもたち
⑪稲荷塚古墳の秘密
⑫雑木林とくらし
⑬多摩市の古木

こうした映像ソフトを学校における事前学習に用い、あらかじめ児童への動機付けを図った上での来館を期していると同時に、こうした試みを呼び水として歴史ミュージアム自体の認知を促進できればと考えている。

さらに、パソコンによる画像検索ソフトとして、すでに展示室で稼働しているデジタルライブラリー「写真で綴る多摩100年」および「多摩で見られる身近な植物」のCD-ROM版を制作し、一般に頒布するとともに、小・中学校にも配布する予定である。このデジタルライブラリーは、今後もシリーズ化し、少しずつソフトの種類を増やしていきたいと考えている。

歴史ミュージアムは、パルテノン多摩という複合文化施設の中にあるためか、地域の歴史学習の場としてなかなか認識されていない現状がある。したがって、上記のような試みをはじめ、さまざまな事業やＰＲ活動を展開するによって、まずはその存在を知ってもらうことに力を注ぎ、少しずつ地域社会のなかに浸透していけるよう努めているところである。

学校教育に対しても同様で、「総合的な学習の時間」に的を絞った特別な対応策は今のところとっていないが、教員や児童・生徒にその存在を知ってもらったうえで、お互いに補い合えるような有機的な関係を築いていければと考えている。その意味で、2002年4月からの正式施行は、その好機としてとらえたい。

新しい取り組みと現状

羽村市郷土博物館

平成14年4月から各学校では新しい指導要領による学習が始まります。「総合的な学習の時間」が加わるほか、小学校3・4年生の地域学習の内容も大きく変わることになります。

当館は、ご承知の通り、玉川上水の取水口に近く、常設展示でも玉川上水の歴史と役割を大きく取り上げています。現在、都内の小学4年生が使用している社会科副読本では、玉川兄弟が取り上げられており、多くの小学校が玉川上水を学習しています。そのため、社会科見学や遠足を兼ねて、当館を訪れる学校が年間150校前後、12,000人弱の児童が来館します。そのうち、希望する学校には、当館の展示説明員による玉川上水に関する説明を行ってきました。

しかし、平成14年度からの学習内容の変更によって、玉川上水を学習しない学校が増えてくることが懸念されます。1年間を通じて見てみなければいけませんが、より多くの学校に見学に来ていただけるよう、これまで利用していただいた学校に直接案内状を送付したり、ホームページを通じてPR活動を展開しています。

『上水記』によれば、玉川上水は1653年（承応2年）に羽村から四谷大木戸まで開削され、平成15年に開削350周年を迎えます。この記念すべき年に、羽村市では様々な事業を計画しています。東京都水道局などのご理解とご協力を得なければならないものも多いので、今の時点で具体的な事業を明示することはできませんが、今でも現役の水道施設である玉川上水の存在感の大きさをアピールしていきたいと考えています。これに先立って、平成14年度にもいくつかの事業を先行実施する予定です。

さらに、平成14年度から新たに実施する事業に「親子博物館教室」があります。これは、学校週5日制に対応した事業で、主に小中学生とその親を対象としています。月1回程度、博物館の仕事を体験したり、事業に協力してもらう参加・体験型の教室です。縄文土器の拓本を採ったり、資料の簡単な整理、里山のくずはき、博物館周辺の自然観察、年中行事の再現など、いろいろな博物館活動に参加していただき、博物館のおもしろさを実感して、将来的には博物館ボランティアに発展させることができればと考えています。さらに「総合的な学習の時間」への博物館としての関わり方にもいい影響となるものと期待しています。

活動事例として、平成13年度では、羽村市立栄小学校6年生の総合的な学習の時間に学芸員が出向きました。授業の内容は、縄文時代の羽村の四季を実体験するというテーマのもと、石器を作るグループ、土器を作るグループ、編布を作るグループ、縄文食を調理するグループ、縄文時代の地形の模型を作るグループ、竪穴式住居を作るグループなどに分かれて作業をし、縄文人の知恵と工夫を学び今に活かすというものでした。毎時間ごとに行くわけにはいかないので、区切りの時間に3・4回ほどでしたが、同校の研究授業にも指定され、多くの先生方に見てもらう機会になりました。本来ならば学習指導案の作成段階から関われるといいのでしょうが、今回は教員の求めに応じてサポートする程度となってしまいました。この手の授業については、日の出町教育委員会の事例が先駆的ではないかと思います。日の出町には博物館施設がなく、小学校の空き教室を収蔵庫兼展示室としており、学社の連携が生まれたということです。授業の実施にあたっては、事前に教員と教育委員会社会教育課の担当者がよく話し合い指導案を作り上げていき、授業後の検討にも強く関与しているようです。

総合的な学習の時間は、あくまで学校での授業だと考えますが、授業のテーマが博物館に関わる場合には、博物館職員（学芸員）が深く関与できる環境整備が非常に重要ではないでしょうか。当館においても、より積極的に関わることのできるよう、環境整備に努めていきたいと考えています。

総合的な学習の時間への2つの取り組み

八王子市郷土資料館

当館の「総合的な学習の時間」への取り組みをご紹介するにあたり、まず今年度の総合学習の受入実績を概観し、その上で今年度より開始した2つの取り組みについて述べてみたい。

2001年度の総合学習受入実績

2001年12月末日までの小中学生による当館の利用実績は、閲覧票・団体入館票その他から館側で把握しているものだけで、32校約230名である。夏休みの来館数をのぞくと200名ほどになるが、その大部分は総合学習であると考えられる。この中には、グループごとにテーマを設定した見学・閲覧のほか、職場体験（13名）もあった。ここには従来3学期に社会科見学で訪れる小学校3年生を数えていないため、単年度の小中学生の利用者総数としては少ない。しかし、すでに多くの学校が総合学習に取り組んでいることがわかる。

常設展示のリニューアル

こうした流れを受け、2001年4月1日から常設展示を一新した。第1展示場（1階）、第2展示場（2階）、特別展示室の3つの展示場のテーマをそれぞれ「こどもれきし展示室」「八王子の歴史と文化」「八王子の文化財」の3本柱とした。このうち「こどもれきし展示室」は小学生を対象として想定している。

「こどもれきし展示室」は、Q&A形式の12の小テーマで構成される。Qは子どもたちからよく出される質問から選んだもので、たとえばQ11の「むかしの子どもはどんな勉強や遊びをしていたの?」では、明治時代以降の教具・玩具などのほか、戦前・戦後の学校の写真や教科書を対比して展示している。ここでは問いの答えを文章化していないが、展示物を観察することによって、子どもたち自身が多様な答えを導き出してほしいと考えている。

また、展示場の中央を体験スペースとし、「さわってみよういろんな土器」「明治時代のはたおり体験」「くずはきかごを背負ってみよう」など、いわゆるハンズ・オンの手法を導入している。ここでは、後述するガイドボランティアの方々の手助けが、大きな役割を果たしている。

ガイドボランティア

当館では、2001年7月から市民の方々による「ガイドボランティア」を導入した。広報で希望を募ったところ、46名の方が事前説明会に参加、30名の応募があった。受入の都合から、7月から第1期として14名の方々が、常設展示の解説を行うガイドボランティアとして活動を開始した。

2日間という短い研修の後、早速ガイドボランティアとして実践にのぞんでいただくこととなった。これには最初から完璧なガイドを要求するのではなく、実地でゆっくり学んでほしいという考えでのことだった。来館者の多い夏休みからいきなり展示室に配置されたボランティアの方々は、さすがに最初はずいぶん戸惑ったようだが、「職員と来館者とのパイプ役」として、展示室でのさまざまな声を事務室に次々と届けてくれるなど、積極的に取り組んでいただいている。ボランティアの方々の活動によって、職員も今までより多くの来館者からの生の声に触れることができるようになり、毎日驚き・喜び・反省の連続で、新鮮な体験をすることとなった。子どもたちに対しても、はたおり機の操作を教えたり、閲覧室での調べ物を手伝ったり、総合学習本格導入へ向けて、心強い助っ人として期待がふくらんでいる。

1月末からは待機していた2期の15名（残り1名は待機）の活動がスタートし、ますますにぎやかになった。今後は当館の関連施設や講座などでの活動も視野に入れ、職員とともに学びながら続けていただきたいと考えている。

以上、当館の総合学習への取り組みについて述べてきたが、これで十分であるとは考えていない。受入実績でみたように、グループ学習や団体見学には上記のような取り組みが有効であろうが、「職場体験」のような2〜3日の研修を行う学校が多くなると、現状での対応はなかなか困難である。総合学習は本質的に「マニュアル化」されないものであり、受入側も同様であろう。2002年からは体験スペースの充実が図られるほか、「モデル授業」などの案も検討中である。

新学習指導要領の実施を前に

日野市ふるさと博物館

平成14年度からの新学習指導要領の施行に伴い、「総合的な学習の時間」への取り組みが始まり、完全学校週五日制が実施される。当館では、このような教育課程の変更を、展示をはじめとする各種事業の充実・見直しをはかる契機としてとらえたいと考えている。市の財政事情が厳しい昨今、当館の運営も種々の厳しい局面にさらされており、博物館の有用性を市民や市当局にあらためてアピールしてゆくことが求められている。そうした中で、今回の教育課程の変更を視野に入れながら、子どもたちにとっても日常的に親しむことができる博物館を作り上げてゆきたいのである。

学校教育との連携

当館ではこれまで学校教育との連携として、社会科見学など団体見学への対応、出張授業、授業等で使用する資料の貸し出しなどを行ってきた。ことに小学校においては、市域の全校の学習に博物館が活用されてきたとも言える。また博物館の側でも、小学校の授業との関連に配慮しながら「考古資料展」や「暮らしの道具今・昔」といったコーナー展示を例年開催し、好評を博してきた。

以上のような事業は、学校教育との連携という点でそれなりの成果をあげ、評価もされてきた。しかし反省点もある。従来の事業は教科学習や学校行事の一環として学校教育のプログラムの中で計画・実施され、博物館はいわば受け身の姿勢でそれに対応していた。しかし、教科別の学習の枠を越えた「総合的な学習の時間」の実施は、様々な物議を醸してはいるものの、学校教育の中で博物館が活用される新たな機会であることは確かである。資料や情報の提供、広報活動の強化など、博物館側から積極的に学校へ働きかけることにより、学校教育の現場に博物館の存在をさらにアピールしてゆく必要があろう。

学校週五日制と博物館

平成14年度からは完全学校週五日制が実施される。休みとなった土曜日がどう扱われるかについては種々の議論があるが、当館としては基本的に、子どもたちを学校から解放し、子どもたちの意思による主体的な活動のために使われるべき時間であると理解している。また言うまでもなく、博物館は学校教育の補助機関でも、総合学習の受け皿として設置された施設でもない。したがって、学校休業土曜日に博物館が子ども向けの事業を行なったとしても、それは学校教育のプログラムにべったりと擦り寄ったものになってはならない。

博物館には博物館にしかない機能がある。特にその中でも、実物の資料を間近に、じっくりと観察できる点は、他の施設にはない、博物館の持つ大きな魅力である。そして博物館の持つそうした魅力こそ、学校休業の土曜日に、子どもたちに味わってもらいたいのである。

もちろんこのような想いを叶えるためには、当館としてもそれなりの対処が必要である。放課後に、休日に、子どもたちが学校の授業を離れて博物館に行こうと思わせる展示、あるいはそのような展示を見たいと感じさせる行事を行なってゆくことが求められよう。

当館では開館以来、大規模な常設展の展示替えを行なっていない。その常設展は子どもたちにとっては決してとっつきやすいものではないが、大幅な展示替えは財政的にも難しい。けれども、そのような展示であっても、内容を充実させ、そこに子どもたちが充分に理解できるような工夫を施すことは可能であろう。

また当館はこれまでも年間十数回の体験学習会を実施してきたが、それらは一過性の行事として終わってしまったうらみがある。体験学習会そのものに様々な意義があったとしても、それらの行事に親しんだ子どもたちがさらに一歩進んで博物館の展示に興味を抱くための工夫、そうした子どもたちを受け止める展示の配慮が求められよう。

体験学習会や社会科見学が面白かったという声はしばしば耳にする。しかし、せっかくそれらを通して博物館に興味を持ち、「また来るね」と言って帰った子どもたちが、後日一人で博物館に来てみたら難しくてわからなかった、面白くなかった、というのでは本末転倒である。常設展など「博物館にいつもあるもの」を通して、子どもたちが日常的に博物館に親しみ、様々な物事に興味を抱くようになってこそ、学校週五日制によって子どもたちが自主的に活動をする時間を設けたことの意義が生じよう。

おわりに

以上、新学習指導要領の実施を前にしての想いを述べてきた。実のところ、当館にとって、これらはまだ理想論の域を出ていない。理想実現に向けての模索は続く。しかし当館では、この教育課程の変更を一つのチャンスとして捉え、大人にとっても、子どもたちにとっても、それぞれの関心に応じて親しめる博物館として、その存在意義をアピールしてゆけるよう目ざしたい考えている。

学校教育との連携―「総合的な学習の時間」にむけて―

東京都高尾自然科学博物館

東京都高尾自然科学博物館は、高尾山とともに自然を学ぶ絶好の場所として、広く都民に利用されている。平成14年度に学校週5日制とともに新学習指導要領が施行されるが、これにともなう「総合的な学習の時間」での自然体験学習に関する照会など、学校からの問い合わせが増えつつある。当博物館では、平成10年度から学校への学習支援に取り組みはじめ、11年度からは従来から行ってきた学習支援に加え、「学校・博物館相互支援推進委員会」を設けて検討し、学校と博物館が連携したいくつかの試みを行っている。

すでに、博物館周辺の自然環境を活用した学芸員の指導による授業（これまで小学校低学年の生活科の授業としてよく利用されている）、学校周辺の自然観察を目的とした学芸員による授業・講義（いわゆる出前授業）、理科教員を対象にした観察指導を主な内容とする博物館および周辺での実地研修（理科部会の研修・同一校教員の研修等）などでの学習支援を行ってはいるが、まだ博物館利用の方法が学校に十分に周知されているわけではない。

そこで、館のより具体的な利用方法についての案内を、都全域の学校（小・中・高）へ送った。それは、博物館の展示や資料の解説、教員等への自然観察指導（指導者研修）、東京の自然に関する総合的な学習での質問等の対応、館内外での授業（自然体験学習）指導協力などでの利用方法である。これには、より効果的に行えるよう、打ち合わせや日程調整の必要性も明示している。それは、年間授業計画の中での位置づけや、何をねらいとした授業なのかを明らかにし、その上で当日の授業の具体的な内容を教員と学芸員が事前に調整して固めていく作業である。

特に当館のような小規模館では、突然の来館の全てを学芸員が対応することは不可能に近い。また、はっきりとした目的やテーマを持たないまま、何かを求めて来館する場合も多い。こうなると有効な回答や資料・情報の提供が不十分となってしまう。さらに、「総合的な学習の時間」では、児童・生徒個々への対応となるため、館側での対応時間や資料準備の不足が問題となる。

また、最近は学校に来て授業（出前授業）をしてほしいという要請も多い。しかし、これは来館よりさらに困難である。学校所在地によっては一日がかりとなるため、学芸員の少ない館としては、留守にして月何日もあちこちの学校に出向いていくのは難しい。それなら、児童・生徒に対してはふだんから接している先生に指導をまかせ、その指導のため先生に博物館を利用してもらうのが効率的である。ということで、学年・学校・教科研究会といった単位での研修指導をすすめているところである。ときには、あるテーマについての調査の説明会を開き、授業への活用をすすめている。

その一つの例が、“学校のプールにおける水生昆虫の調査”である。学校のプールは、使用期間外にも防火水槽代わりとして水を張っておくことが多い。博物館では、そこに水生昆虫がすみつくことに着目し、プールの生きもの調査を2年前に行った。

この調査は、当館から出かけていくのに短時間ですむ八王子市の小学校を選び、調査の教材化の有効性を説明して、46校の協力を得てプール使用前の水抜き清掃の前に実施した。

トンボ類やカゲロウ類などの幼虫・ゲンゴロウ類などが結構住み着き、学校周辺の環境によりその種類にも違いが見られて、教材としてもなかなか面白いものであることがわかった。昨年、2回目を実施したが、希望校が多く、一校一校学芸員が出向いて指導することが困難となったため、学校に主体となってもらって調査をかねた授業を行い、博物館は調査方法や授業への生かし方の指導や協力をすることにした。そのために、ある一日、特定の学校のプールを使用し、希望校の教員に集まってもらい説明会を開いた。

各学校の調査結果を比較すると興味深い結果が出、授業にも使えるので、14年度は八王子市だけでなく都全域の教員などに向け、博物館の事業の一つである自然講座「プールの生きもの―総合的な学習にむけて―」を行い、その中でこの調査の意義や方法を伝えることになっている。

自然観察会
「水の中の生きもの」

博物館活動の再考―「総合学習」を考える―

くにたち郷土文化館

平成14年度より実施される学校週5日制と、「総合的学習の時間」に関しては、各種メディアにおいても、様々取り上げられ、活発に（？）意見が交わされているが、当館では、実際のところとりたてて検討していない。それは、「総合学習」という名のカリキュラムが取り上げられる以前から、当館において行っている博物館活動自体が、「総合学習」に対応する事業であると判断しているからである。以下、判断する根拠に該当する事業をいくつか挙げてみたい。

まず、当館では開館以来、毎年1月末～3月初めにかけて、小学3年生の「昔の暮らしを学ぶ」という単元に対応した、「民具案内」という事業を行っている。これは、市内公立小学校8校と私立小学校3校の生徒800～1000人が対象で、行灯や提灯、大八車、背負い籠、洗濯板を使用した洗濯、石臼ひき、縄ないなどを体験する。「くにたちの暮らしを記録する会」（市内の民俗伝承や民俗などを調査・研究し、次代に継承している50～90歳の会員によって構成されているグループ）の会員により、利用方法などとともに、使用当時の思い出話、生活体験などを習う体験学習会である。

また、「我ら稲作人」という事業は、公募ではあるが、児童・生徒の親子と一般参加者、総計60名ほどで、年間を通して稲作に関わるすべての行程を体験する事業である。

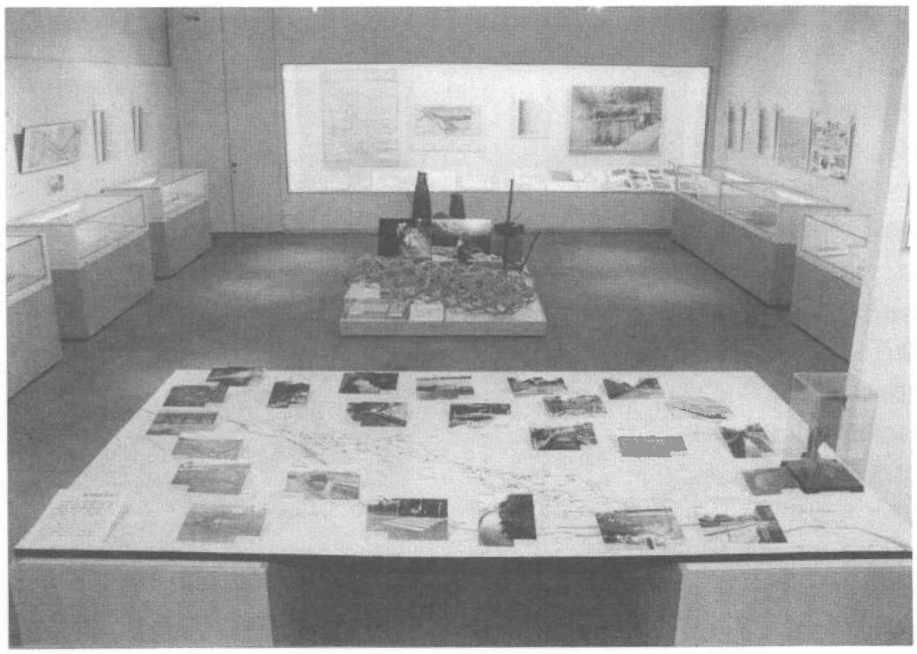
他にも、「自然クラブ員」を募集し、年間6回前後、各種自然体験事業を行っている。

まだまだ多くの事業を展開しているが、これら事業すべては、参加して終わりという一過性の事業にするのではなく、体験を通して、児童・生徒と地域の大人が交流をし、興味を覚え、知識を得、考える力、生きる力を学ぶ空間としていくことを目的としている。

昨年秋に行った企画展「府中用水」もまた、こうした「総合学習」的な要素を含ませて企画した。当館においてこれまで行われてきた展示は、歴史展示なら歴史叙述にのみ、民俗展示なら民俗叙述にのみ、その内容の重きを置きがちであったため、幅広い年齢層、多岐にわたる地域の方すべてに馴染む展示となりにくかった。そこで、そうした幅広い見学者の興味を引き出すためには、様々な角度から展示を展開する必要性を痛感していた。

そこで今回の展示では、府中用水という農業用水の現在の様子を写真で公募し展示、水槽を使用した自然景観の復元、3畳ほどの府中用水流路図と現況の写真、江戸時代から現代にかけての文書資料、用水における漁業関連の民俗資料の展示を行った。これにより児童・生徒らは水槽の魚や動物写真、地図を中心に展示見学を行い、ついでに民俗資料や古文書を見学するという展開を示した。これは市内散策の過程で訪れた他地域の方たちも同様である。また、歴史背景を学びたいと来られた見学者は、文書資料や古写真の見学を楽しんだ後、水槽や流路図を見学し、その現在の様子を学ばれていた。

このように、「総合学習」というカリキュラムへの対応は、実は博物館がこれまでに行ってきた事業展開で十分対応できるものであり、さらに一般利用者もまた同様のサービス提供を望んでいるし、その希望に沿うことができるということである。



博物館が博物館らしく、社会教育機関として、各利用者の学習のためにどのように情報を提供していくか、これを念頭に置いた事業展開をしていけば、新たに開始されるカリキュラムに右往左往する必要はないのである。場当たり的な発想による事業展開ではなく、数年先を見越した事業をこれからも創造してゆきたい。

学校教育との連携

東京農工大学工学部附属繊維博物館

東京農工大学工学部附属繊維博物館は、小・中学校の隔週土曜休日制度が始まった平成5年から「子供科学教室」を開催するなど、小中学生に対する科学教育に深い関心をもっています。「子供科学教室」は、地域の小中学生を対象として年間8回開催され、毎回大学の教官が最新のデータを分かりやすく指導しており、好評を博しています。平成13年度までに計77回、のべ約3000人の子どもたちが参加しました。

「子供科学教室」
身近な材料を使ったプラスチックの性質を調べる実験

さらに「総合的な学習の時間」に対して、繊維博物館の活動が生かされている事例が最近増えてきています。「総合的な学習の時間」のテーマとして、綿紡ぎや養蚕といった昔の日本の手作業を取り扱う学校が多いのですが、最近の若い先生方はこのような作業を体験したことがありません。そこで繊維博物館に「綿花から糸を紡ぐのはどうすればよいのか」あるいは「繭から生糸のとり方を教えて」といった問い合わせが多数寄せられます。このような場合に非常に貢献しているのが、繊維博物館友の会のサークル活動です。

繊維博物館友の会は昭和54年に発足しました。その趣旨は会員の学習や研究の便宜をはかり、かつ繊維博物館発展に寄与することを目的にしたものです。その活動の中でもサークル活動は特にユニークな活動として知られています。サークルには織物、手紡ぎ、藍染め、組ひもなど12のサークルがあり、約260名の会員が活動しています。友の会サークル活動は講師の先生に指導されるのではなく、すべて会員の自主的な活動により先輩から後輩へと技術が受け継がれていくところに特色があります。手紡ぎや製糸に関して学校からの問い合わせがあると、まず先生にサークル活動を見学していただいています。見学で学んだ技術を学校に持ち帰って授業に生かされる先生、子どもたちを連れて見学に来られる学校、サークル会員が小学校に出向いて子どもたちを指導する場合などいろいろですが、サークル活動の存在は学校、博物館、そしてサークル会員自身にとってたいへん役立っています。

また繊維博物館では、東京農工大学の卒業生を中心に、繊維関連の技術をもつ人たちによってボランティア集団「繊維技術研究会」が組織され、紡績機械や自動繰糸機、織機、編機、ミシン、組ひも機などの整備が進められています。小学生たちが団体見学に訪れたときに繊維技術研究会の会員が活動していると、機械が動いているところを見ることができ、子どもたちは大喜びします。

このように繊維博物館の活動は、一般の方々の大きな支援を受けています。サークルや繊維技術研究会の会員はかなりの年配の人たちが多いのですが、彼らが生き生きとして活動をしていること自体が、小学生たちにとって非常に良い教育になるのではないかと思います。

「子供科学教室」やサークル活動の予定は、繊維博物館のホームページに掲載されていますのでご覧ください。(URL:http://www.tuat.ac.jp/~museum)

サークル会員の指導によるスピンドルを使った糸紡ぎ

学校教育との連携「親しむ博物館づくり事業」

東村山ふるさと歴史館

東村山ふるさと歴史館では、昨年の平成12年度に「親しむ博物館づくり事業」の申し込みをおこない、幸いにその委嘱をうけた。実際委嘱を受けたのは9月のことで、事業を実施したのは2月下旬のことであった。そのため昨年の「ミュージアム多摩」には、その紹介をすることができなかったが、今回のテーマのひとつが、「『総合的な学習の時間』の取り組み」ということで、事業終了後の反省とその後の学校との関係も含め、記させていただく。

この「親しむ博物館づくり事業」とは、文部省（現在の文部科学省）が、平成14年（2002）から実施される学校完全週5日制の実施に向けて、平成11年度から3年間おこなわれた緊急こどもプランのうちのひとつである。博物館や美術館などがおこなう、こども向けの展示や事業に対しての支援事業をいう。

ふるさと歴史館では、「チャレンジ！ふるさと昔のくらし」と名付け、市域の南側に流れている「野火止用水」を中心とした学習の援助と、近年発見され、注目を浴びている「下宅部遺跡」を土台とした、縄文時代の体験学習のための貸出資料の開発に取り組んだ。「野火止用水」の学習資料に関しては、以前からその必要性を市内の図書館などから投げかけられていた。平成12年度の秋の特別展に、この「野火止用水」を取り上げたのもひとつのきっかけである。この「野火止用水」の歴史については、小学校の高学年には難しいテーマであること、特にそれを体験的なものにするのは至難であろうということから、野火止用水にかかっていた水車に注目した。この水車の仕組みが理解しやすいようにと、高さ150センチのミニチュアの水車を作成し、水車がなぜ作られたのかなどがわかるカードゲーム式のクイズを作成した。

「下宅部遺跡」の縄文体験については、多くの博物館がおこなっている縄文体験をベースに、下宅部遺跡らしさを加えた体験のためのレプリカ資料を作成した。ここでは、縄文時代の道具や暮らしの技術的な必要性を体系的に学ぶために、ひとつひとつの縄文体験につながりを持たせ、縄文人の生活の一端を疑似体験させるようなストーリーを想定し、学習プログラムを作ることが留意された。また、これらの学習プログラムは、体験を中心にすえて作成されたが、学習の重要性は、その事前の学習と事後の学習であることも強調している。

平成12年度は、これらの資料を携えて、数校の小学校で下記の写真のように実際の授業をおこない、先生とこどもたちの好評を博した。

しかし、平成13年度になり、学校からの借用は、縄文時代の資料を小学校6年生の歴史学習導入への材料として使用した数校のみであるのが現状である。実際、資料を作成したが、借りて行く学校が少ないのでは、まったく意味をなさない。そのため、昨年の秋に市内の全小学校15校に対して、学校訪問をおこない、ふるさと歴史館の利用に対してのリサーチと営業をおこなった。

実際の利用に関しての意見は、ふるさと歴史館を訪れ、利用するにも学校からの距離や交通が不便であるので、気軽には利用ができないこと、また資料を借りたいと思っていても資料を搬入・搬出する車両がないことなどである。また、資料だけでなく学芸員の出前授業についての質問もあった。

これらのことは、ふるさと歴史館の問題だけでなく、教育委員会内の問題でもあるといえる。また、今回の訪問では、利用者である学校からの要望は、歴史館の今後の運営にとっての貴重な情報が得られた。そしてそれだけでなく、人と人のつながりの重要性をあらためて認識させられた。歴史館の開館からの他のアプローチの成果でもあるが、学校からの相談が多くなり、ふるさと歴史館の存在が少しずつ学校にも定着してきたといえる。

縄文体験　弓矢づくり

囲炉裏端のある資料館

瑞穂町郷土資料館

1　囲炉裏端

瑞穂町郷土資料館は、瑞穂町図書館の3階に設けられています。昭和52年に開館し、平成14年で開館25周年となります。

開館の当初から、囲炉裏端を館内に復元し、昭和30年代まで町によく見られた農家の台所器具や農具・養蚕具・機織具を常設展示してきました。当初の展示は町の農家の現況にかなり近いものでしたが、昭和から平成への移行の中で、この常設展示自体が、いまでは大切な歴史的存在となりつつあります。

館内常設展示・囲炉裏端

昭和30年代まで、町に見られた農家の営みも、現在ではほとんど消滅しています。たとえば農家の広い庭先での豆類などの収穫物の乾燥作業など、かつては日常的に目にした風景でしたが、今では皆無に近くなりました。

本館では、年間に企画展2回・特別展1回を開催していますが、これと並んで囲炉裏端を中心とした常設展示を現在の観点から見直し、「総合的な学習の時間」と連携した清新な活動の場にしたいと努めてきました。

2　狭山丘陵と残堀川・不老川

瑞穂町は町域のほぼ中央に狭山丘陵の最高地点194mを擁しています。丘陵のふもとは、現在では貴重な里山としての共通理解が得られ、生息する動植物を含めた自然環境を積極的に保全する施策が講じられるようになりました。狭山丘陵の中心部分が都立野山北・六道山公園として整備されましたため、今後はより広い視野からの自然認識が行われ、「総合的な学習」の格好の野外活動のフィールドとしての役割が期待されています。

狭山丘陵南麓・滝田谷津

残堀川・源流地付近

瑞穂町はまた、残堀川と不老川の源流地を町域に含んでいます。残堀川は多摩川水系の支川として近世以来、玉川上水の助水としても知られていましたが、現在は埼玉県側に流れる不老川とともに、丘陵の裾野の貴重な「里川」として、流域の水生生物・野鳥・植物の保全と環境浄化を行っています。

3　企画展・特別展

本館では、平成13年度に企画展2回・特別展1回を開催しました。

■企画展「里山―人が創り出した狭山丘陵の自然―」（平成13年7月1日～8月31日）　近世以来、里山として機能してきた狭山丘陵南麓の動植物と自然を解説し、昭和30年代の農家の生活用具や子どもの玩具を展示しました。

■秋季企画展「源流―狭山池・残堀川・不老川の景観と遺産―」（平成13年10月20日～12月15日）　多摩川水系と荒川水系の二つの源流地点を調査し紹介しました。瑞穂町を「丘陵と源流の町」としてあらためて認識し、かけがえのない自然の保全への理解が進みました。

不老川・源流地付近

■特別展「なつかしい江戸と明治―瑞穂町の祭礼・信仰・行事―」（平成14年2月1日～3月31日）　江戸時代からの獅子舞資料や石造文化財、また正月の繭玉などの年中行事を紹介しました。

いずれも「総合的な学習」への発展を踏まえ、特に町内の小学校との連携を密にしてきました。

市制施行五十周年記念特別展「青梅の名宝」

青梅市郷土博物館

1　展示概要

平成13年度の当館の展示は、市制施行五十周年特別展と題し、「青梅の名宝」を9月11日から12月2日まで開催しました。この特別展は、市内に数多くある指定文化財のうちごく一部ではありますが、合計37点を前期後期に分けて展示しました。

写真1　注口土器および小型深鉢形土器

展示品は、重要文化財紫裾濃鎧（武蔵御嶽神社）、同絹本着色如意輪観世音像（金剛寺）、同寺改戸遺跡土壙出土品の注口土器および小型深鉢形土器（当館）（**写真1**）をはじめとする国指定文化財が中心となっています。これに加えて考古資料では、駒木野遺跡から出土した、深鉢型土器が展示されました。

神道・仏教の美術・工芸等では、都有形文化財鉄製俵形賽銭箱、釣燈籠、倶利伽羅太刀、懸仏（4点とも武蔵御嶽神社）、神鳩、飯綱権現像（2点とも下山八幡宮）、都有形文化財絹本着色高野四所明神図、同青磁鉢（2点とも金剛寺）、世尊寺の釈迦如来坐像（天寧寺）、鰐口（花蔵院および慈眼院）、緒綯曼荼羅（延命寺）、大般若経および経櫃、両界曼荼羅、不動明王図、明王立像（5点とも安楽寺）。

中世三田氏・北条氏関係文書や遺品からは、旧宝林寺文書（当館）、禁制状（安楽寺）、所領安堵状（三田隆弘氏）、三田氏軍旗および兜前立（乗願寺）、並木家中世文書（当館）。

近世・近代を代表するものとして、都有形文化財新町開村記録4冊（吉野秀子氏）、都有形文化財絹本着色田辺清右衛門惟良像（金剛寺）、谷合氏見聞録（清水高志氏）、市川家日記（市川広久氏）、慶長検地帳（福島康正氏）、小林天渕画像（当館）、小峰峯真書屏風（青梅織物協同組合）、日本産狼頭骨等（井上芳一氏）、子安観音堂奉納石灰採石場図絵馬（慈眼院）など、多岐にわたる文化財を展示しました。

このような、指定文化財を集めた展示会は、当館にとって10年ぶりで、来館者の方には普段非公開の展示品が多かったのも手伝って、大変好評のようでした。

2　展示解説講座

展示会に合わせ、11月18日と24日に展示解説講座を行いました。

11月18日は、青梅市文化財保護審議会委員齋藤慎一氏により、「武蔵御嶽神社の宝物」を解説していただきました。内容は、宗教的、文化的施設の立地条件をもつ青梅市域内にあったこと。中世においては、鰐口や大般若経などの文化財による御嶽の存在。そして、紫裾濃鎧、懸仏等から見られる金と銀、ぼかし、羽毛文などの意匠の面から中世文化の受容形跡。また、鉄製俵賽銭箱や倶利伽羅太刀から見える地方文化の伝存、保有についてなど長時間にわたって説明していただきました。

24日は、東京国立博物館山本勉氏の「『青梅の仏教美術』について」と題し、今回の展示に関係する仏像、仏画、仏具等を一つひとつその文化財として経緯や信仰上の意義を説明していただきました。

八王子市文化財保護審議会委員加藤哲氏は「三田氏と中世」というテーマで、展示している中世文書を一つひとつその文書の意義について、また三田氏から北条氏に政治的支配が移っていく過程を詳しく説明していただきました。

写真2　11月24日の座談会のようす

展示解説後、齋藤氏も加えそれぞれのテーマで講演を行っていただき、「文化財を通して青梅市の景観を考える」というテーマで座談会（**写真2**）をおこないました。3人の講師の先生はそれぞれの専門的立場からテーマに沿って青梅市域の特徴をのべられ、49名の受講者の関心を誘っておられました。

平成13年度事業報告「中世の立川を探る」

立川市歴史民俗資料館

平成13年度の事業のなかから、11月に実施された「中世の立川を探る」について報告します。この事業は、企画展に加えて、関連事業として講演会を合わせて実施したものです。

きっかけは一昨年、中世の立川氏文書が立川市に寄贈されたことに始まります。立川氏は中世武士団武蔵七党の西党に属する武士で、鎌倉時代から室町時代を通じて、立川市域周辺に勢力を持っていました。立川氏の動向を明らかにすることは、立川市の中世史を解明する重要なテーマのひとつで、立川氏に関する古文書が寄贈されたことはとても意義深い出来事でした。

その後の調査の結果「立川氏文書」は、平成13年9月1日、市指定有形文化財の指定をうけました。指定された文書の内訳は2本の巻子と系図の計3点です。

嘉暦4年(1329)8月7日 関東下知状

1本目の巻子は立川氏文書原本です。この巻子には文保2年（1318）から応永24年（1417）までの6点の文書と2点の断簡が貼り付けられています。江戸時代に写本がつくられており、文書の内容は既に知られており、これらの原本と推定されます。

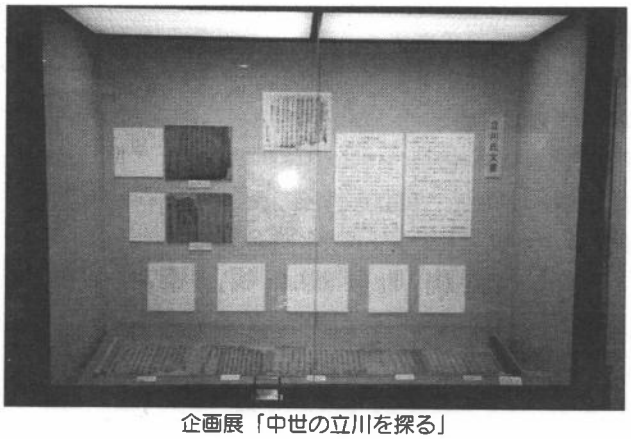
2本目の巻子は立川氏文書写本で、貞応元年（1222）から元徳2年（1330）までの5点の文書の写しが貼り付けられています。これらの文書は写しではあるものの、文書の内容は今までに知られていないものであったため、新発見文書となりました。

系図は江戸時代につくられたと推定され、そのころ残っていた系図と当時の家系をあわせてつくられています。

巻子に貼られた11点の文書（写）は、関東下知状や譲状など、すべて土地の移動に関するもので、立川氏が所領を展開していた様子がよく分かります。

一方、市内には立川氏が館を構えていたと伝えられる場所があります。立川市柴崎町にある玄武山普済寺という寺院の境内がその場所とされ、立川氏館跡として東京都指定史跡に指定されています。平成8年から平成9年にかけて発掘調査が実施され、その成果が注目されていました。

以上のような経緯から、立川氏文書と立川氏館跡発掘調査の成果を紹介するため、平成13年10月30日から12月2日まで、当館の企画展示室において企画展「中世の立川を探る」を開催しました。指定文化財となった立川氏文書をはじめ、発掘調査で出土した陶磁器など約80点の資料を展示し、期間中は約1,500名の入場者がありました。



企画展「中世の立川を探る」

また、11月10日には立川駅北口のアイムホールにおいて3名の講師による講演会を実施しました。当日はあいにくの雨天にもかかわらず、100名をこえる参加があり、多くの方が関心をもっているテーマであることが分かりました。

今後、文書に登場する人名や地名の比定、館跡との関連などの研究課題が残されています。

講演会のようす

新たな活動に向かって

福生市郷土資料室

戦争の世紀といわれた20世紀が終わり、平成13年度は、21世紀という新しい時代を迎えました。福生市は本年度に市制31周年、福生市郷土資料室でも、開館21年目にあたり、新しい視野の活動へと方向性を見定め、始動していく時期に入ってきたと考えております。

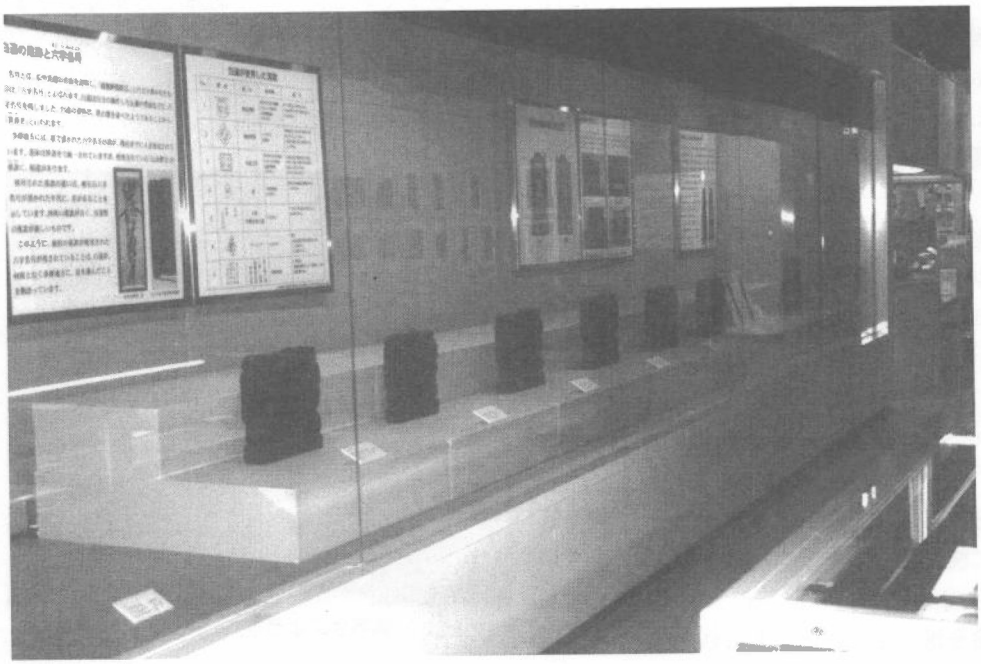
これまでの郷土資料室の活動は、郷土の歴史・文化・自然の理解と、それらの保護思想普及をはかることを目的としてきました。福生市では、昭和48年に市文化財保護条例を制定（昭和54年に全文改正、平成3年4月1日に一部改正）し、学術的に貴重な文化財は、福生市文化財登録台帳に登録し、さらにこの市登録文化財のうち、重要なものを市指定文化財に指定して保護しています。市内に残された多くの文化財の基礎的な資料を作成するためのこの文化財総合調査は、昭和45年から実施されており、現在までに30集の報告書が刊行され、本年度も第31集「熊川分水」の刊行を予定しております。このような調査を行ないながら、郷土資料室で展示や学習会などの公開・普及事業を開催してきました。

福生市が現在の行政区画となってから、本年度で31年目となります。歴史と文化財の豊かな多摩地区には、数万年前から人々の営みがあります。限られた地域や歴史にとらわれることなく、調査・研究、公開・普及活動を行なっていくためには、テーマ性を持ち、多摩地区というより大きな素材の元で博物館が連携していき、より多くの情報を収集していくことが必要なのでしょう。また、地域に埋もれた文化財の発掘、消滅の危険性のある文化財の調査・保護を新たな課題の一点として加え、今後の郷土資料室事業を進めていきたいと考えております。

平成13年度に郷土資料室では特別展「多摩の微笑仏～木食白道～」を開催いたしました。木食白道とは、現在の山梨県塩山市出身の僧侶で、江戸時代の終わりごろ、全国を行脚しました。行脚の旅のなかで白道は、民衆の要望に応じて加持祈祷や慈善事業を行ない、民衆の幸福を願いながら仏像を刻み、版画を刷り、書を書き、分け与えていきました。白道の残した仏像などの資料は、各地で発見されていますが、その数は大変少ないです。地域に埋もれた歴史のため、研究が少なく、資料が発見されにくいのでしょう。また、その資料のほとんどが個人所蔵であることも、その要因と思われます。このように少ない白道の足跡が、多摩地区に遺されています。多摩地区の西部で20点ほどの資料が、現在までに確認されています。

今回の特別展示は、地域に埋もれるこの白道の資料発掘を目的として開催しました。白道についての情報提供を、広報や各新聞紙上において呼びかけました。福生市内からの発見を期待しましたが、結果的には発見できませんでした。しかし、数多く寄せられた情報から、新たにあきる野市で2点、八王子市で1点、日野市で1点の計4点が発見されました。展示の大きな目標が達成できたと思います。

白道の研究や資料の発見は、まだ始まったばかりです。多摩地区には、このような埋もれた歴史や文化がまだまだあることでしょう。郷土資料室では、展示や企画を通じて、情報の収集や提供を行ない、新たな資料の発掘と、多摩という歴史・文化・自然の豊かな地域での協力・連携をより一層はかっていきたいと考えております。



2001年度町田市立博物館展覧会実績と予定

町田市立博物館

■ベトナム青花－大越の至上の華－

3月27日(火)～5月6日(日)

ベトナムで青花が焼かれ始めたのは14世紀と考えられます。その最初期の姿から前期の上質の青花、輸出全盛期の青花、江戸初期の日本と関係の深かった黎朝の青花など、ベトナムの青花の流れを一望にする展覧会でした。

■土門拳－日本の彫刻－　5月15日(火)～7月1日(日)

写真家・土門拳（1909-90）は、その生涯に日本の彫刻を数多く撮影しています。

本展では、彼が1979年に病に倒れる直前まで編集を行っていた『日本の彫刻』（1979-80）より、飛鳥時代から鎌倉・南北朝時代にかけての多くの仏教彫刻のなかから各時代を代表する約80点の彫刻を選択し、それらの姿を130カットの写真で展示しました。

■うつわに咲く花　7月10日(火)～9月2日(日)

植物文様は、古くから焼きものを飾る文様として親しまれてきました。たとえば、蓮や牡丹は単にその美しさのためだけでなく、人々の幸福を象徴するものとして描かれてきました。

本展では、町田市立博物館所蔵の中国、東南アジアの焼き物の中から、花が描かれた作品を選び、展示しました。花と焼き物と、両方の魅力を楽しんでいただいた展覧会でした。

■香水瓶

9月11日(火)～10月21日(日)

5000年の歴史の中に見る千変万化の香水瓶は、どれも香りを入れるために特別に作られた小さな容器です。ガラス、陶磁器、金属等さまざまな素材で作られています。

本展では、ガラス製香水瓶を中心に、香水瓶の歴史を紹介しました。

■仕種と表情

10月30日(火)～12月9日(日)

仕種や表情の豊かさは、人と人との円滑なコミュニケーションに欠かせないものであり、人々の心を大いに和ませます。

ここでは、館蔵の戯画錦絵版画の中から、一勇齊國芳や小林清親など幕末から明治にかけ活躍した浮世絵師達による、仕種や表情を表す作品200点を選び前後期に分け紹介しました。

■発掘された町田の遺跡－旧石器時代から中世まで－

2002年1月5日(土)～2月24日(日)

町田市は、東京都内の遺跡のうち約20%が集中する遺跡の宝庫である地域です。特に多摩丘陵の豊かな森の恵みに支えられた縄文時代の遺跡からは、多くのすぐれた出土遺物が発見されています。

本展では町田市内出土の考古資料を縄文時代を中心に旧石器時代から中世にわたって展示し、出土遺物から見た町田の通史を紹介しました。

■養蚕機織図　3月5日(火)～4月7日(日)

養蚕は稲作と共に日本の農業の根幹をなしたもので、かつての日本でも盛んに行われていました。当館ではこれまで稲作図の展示を何度か開催しておりますが、今回は養蚕と機織りを取り上げ、屏風・山車水引・絵巻・錦絵などで養蚕機織図を紹介します。

「土門拳－日本の彫刻－」チラシ

「香水瓶」チラシ

旧市倉家住宅と「儀三郎日記（二）」

あきる野市五日市郷土館

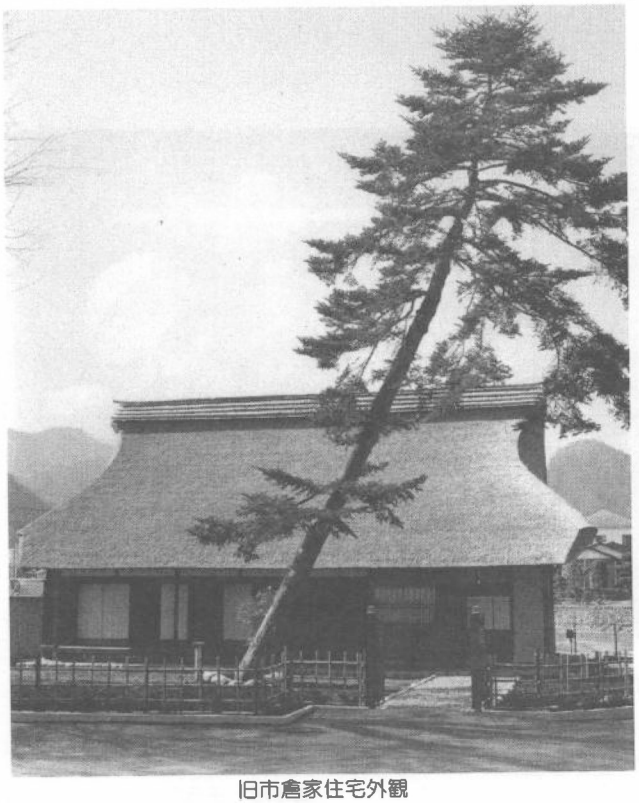
■旧市倉家住宅が平成13年4月から公開されました

旧市倉家住宅は、江戸時代末期の構造、形式をよく残し、建築の質の高さと当時の生活様式を伝える歴史資料として高く評価されました。また、養蚕技術の変遷を伝える構造や、改造跡があり、保存状態も極めて良好であったことから、平成10年9月3日に市指定有形文化財（建造物）となり、あきる野市五日市地内から五日市郷土館敷地へ平成11年から移築工事が始まり、平成12年12月に工事が完了し、平成13年4月から公開されました。

建物の概要は、入母屋造りの茅葺きで、上屋桁行きが7.5間、梁行き3間です。内部は、北側の土間部と南側の床上部に分かれ、土間部には石組みのナガシの上に板敷床が張り出し、北西隅にカマドが造られたダイドコロとなります。

床上部は、表にザシキ・デイ、裏にオカッテ・ヘヤ・オクを配しています。平面形式は、田の字型に各部屋が配置された四間型ですので、裏のオカッテとヘヤが分かれることから変形四間型となり、江戸時代末期から明治時代にかけての一般的な農家の形態を残しています。

復原では、屋根材の茅・杉皮・竹のほか、土台・根太・貫など、腐っていたり強度が不足して使えない部材以外は旧材を使っています。柱や梁などの主要な木材は、腐朽した部分を切り取り、接ぎ木をして再利用しています。特にカマド北側の梁は、虫喰いが激しくホゾが効かなかったため、内部をくり抜いて人工木材で成型し、補強木材を組み込んでいます。



旧市倉家住宅外観

また、壁土は解体の時に集めておいた土に、新しい荒木田土と刻んだ藁を加えて発酵させたものを使いました。このように、古い材料・天然の材料を上手に使い、昔ながらの技術で復原したのです。

この建物の特徴は、上屋桁が上屋柱筋から東西1.2尺、南北1尺外に出ていることです。これは、地方寺院の本殿などに見られる出桁造りで、堂宮大工であった旧市倉家の当主が自分の居宅に特殊な構造を取り入れたものと思われます。

■「儀三郎日記（二）」明治の元締(1)が発刊されました

秋川谷旧西多摩郡戸倉村星竹の材木商黒山儀三郎の安政6年から明治41年までの50年にわたる日記のうち、明治2年より同11年までの第2巻です。この時代は文明開花期で、秋川谷の民衆が封建社会から近代社会への移行をどのようにくぐり抜けてきたかが具体的に描かれています。明治初期の新政府は制度改革を次々と打ち出しました。しかし、人々は永年にわたって身につけた生活習慣を簡単に切り換えることができず、生活に浸透するまでには2、3年の時差を要しました。この図書の面白さは、通常の教科書知識に欠落しているこの過渡期の生の姿が見られることです。

例えば、新政府の新政策のうち、即実施となったのは明治6年1月の太陽暦の採用です。日記は以来新暦に移行していますが、旧暦を下段に併記し、「四ツ、七つ」の表現もなかなか改まっていません。明治4年の断髪令については、東京出張の多い儀三郎は「東京市内の散髪流行」という新聞記事にもかかわらず、「髪結」を続け、ようやく9年12月になって「戸倉に髪かり」という記事があらわれています。

東京に月7、8回も出張した儀三郎は、玉川上水の乗合舟、甲州街道を走る乗合馬車、人力車、明治6年には「品川より陸車船に乗り川崎に出る」とあり、刻々と変化する交通機関を巧みに利用しています。この図書はこうした新旧入り混じった過渡期を知る上で貴重な資料です。

平成13年度実施事業

武蔵村山市立歴史民俗資料館

1　講座・教室

事業名	概　要	講　師	期日	会場	参加者
歴史講座 「軽便鉄道羽村―山口線」	かつて市内を通っていた軽便鉄道羽村―山口線の軌道跡を見学し、近代遺産について理解を深めた。	けいてつ協会 岡本　憲之 村山郷土の会 石川　伊三郎	6月9日 6月16日	羽村取水堰ほか	29人
夏休み親子縄文土器づくり教室	市内出土の縄文土器をモデルにして、原始時代の生活について学んだ。	市役所陶芸クラブ 山田　直良 当館嘱託 高橋　　学	8月4日 8月18日	資料館	19人
体験教室 「サツマ団子とヤキモチを作ろう」	作り方の紹介と、今日のおやつとの違いを考えた。	郷土料理愛好家 池谷　タカ	9月22日	岸地区・里山体験施設	20人
文化財講演会 「武蔵村山歴史事始め」	武蔵村山における郷土史研究の黎明期について講演を行うことによって、文化財保護意識の普及、啓発に努めた。	市文化財保護審議会委員 村山　春美	11月10日	〃	23人
特別展講演会	「山村聰・古賀磐安兄弟と武蔵村山青年の文化活動」について講演を行った。	岩手大学名誉教授 藤原　暹	11月17日	資料館	37人
体験教室 「しめ飾りを作ろう」	かつての生活の一端を体験しながら行事の意味を考えた。	東京農工大繊維博物館サークル会員 小川　栄子	12月15日	岸地区・里山体験施設	20人
体験教室 「まゆ玉かざりをつくろう」		養蚕家 渡辺　章一 渡辺　孝子	1月12日	〃	53人
狭山丘陵の野鳥観察会	野鳥観察を通して、狭山丘陵の自然を知る。	日本野鳥の会 奥多摩支部会員	2月16日	狭山丘陵内	――

2　展示活動

展示会名	期　間	内　容
常設展示 「武蔵村山その自然・歴史・民俗」	通　年	武蔵村山市の自然・歴史・民俗の概要を紹介
収蔵品展 「狭山丘陵の植物と昆虫」	7月28日～8月25日	市史自然編調査資料の公開
特別展 「戦後の文化活動」	10月21日～12月27日	俳優山村聰氏と戦後の青年団活動に焦点を当て、戦後の文化活動を紹介
借用資料展 「進藤コレクションの蚕織錦絵」	2月3日～3月10日	市内の民具コレクター進藤進氏が所蔵する蚕織錦絵の一部を借用し紹介
季節展 「五月人形・ひな人形・恵比寿講ほか」	随　時	季節感を出すコーナー展示

企画展「寺子屋から学校へ」開催

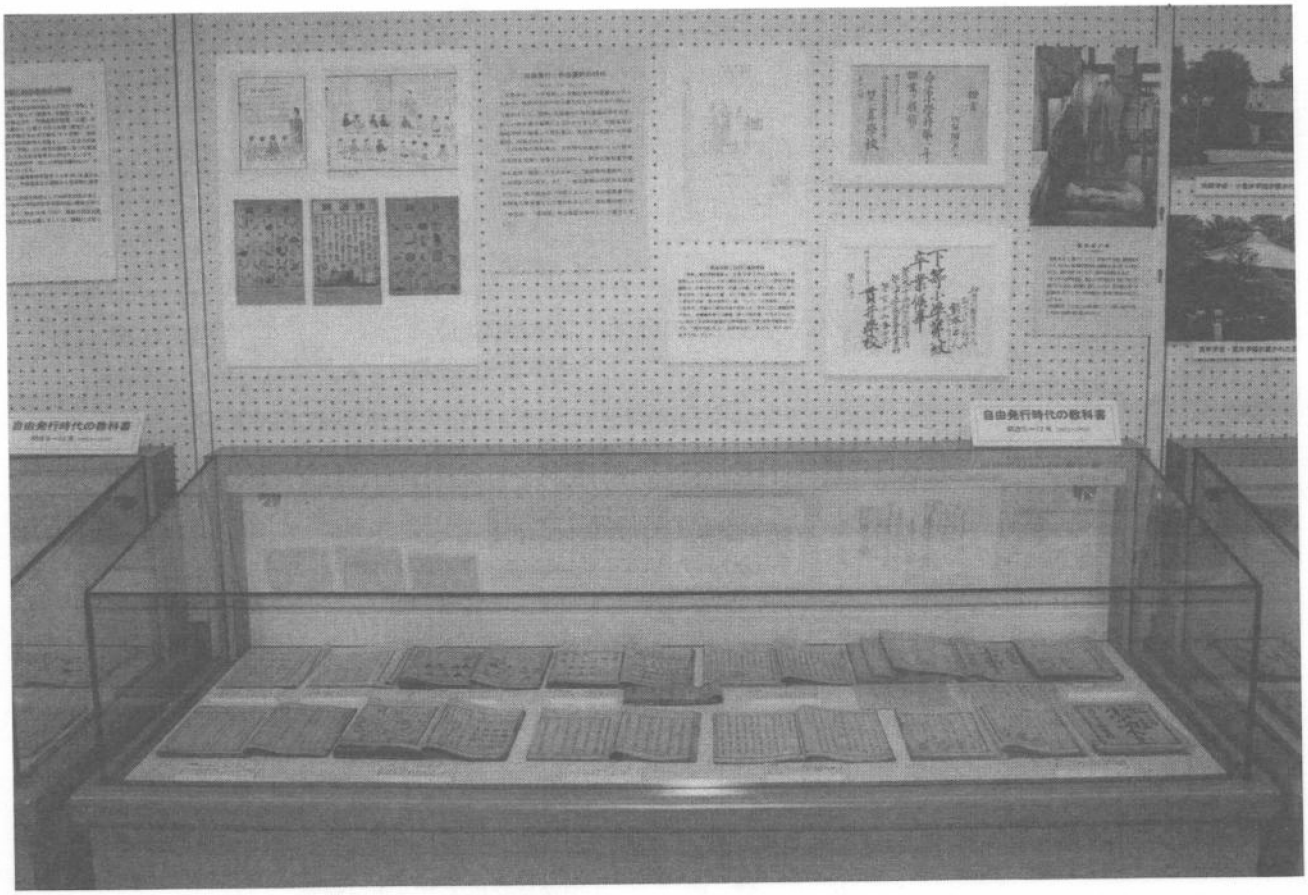
小金井市文化財センター

今年度は、学校教科書の採択を巡って内外に様々な動きがありましたが、当館では、教科書の歴史を客観的に顧みようと「教科書に見る教育の歩み」と副題して、地域の教育史に関する企画展を開催しました。

江戸時代から戦前までを対象に、学校教育制度や教科書制度の変遷に沿い、地域の動向を交えて展示構成しました。寺子屋関係では、『商売往来』・『実語教・童子教』・『庭訓往来』等の往来物の他、『女大学』・『女今川』等の女子用往来、自筆の御手本類等50点余、学制発布以後の学校の教科書については、①自由発行の時代、②届出制・許可制の時代、③検定制の時代、④国定制の時代に区分し、100点余を展示しました。できるだけ多くの資料によって視覚的にも各時代の特徴や変遷がわかるように工夫し、全ての資料に解題を付け、理解の一助とし、さらに主要な資料はコピー本を作成し、自由に閲覧できるようにしました。

来館者には大変好評な企画で、実際に使った世代には懐かしさが募り、若い世代にとっても、時代背景を理解することにより“教科書とは何か”を改めて考えるきっかけとなったものと思います。また展示に関連して「教科書の人間像」というテーマで講演会を開催し、これまでにないほどの来館者があり、入館者増の秘訣は企画次第と痛感しました。

教科書は、正に日本の近代史の縮図であり、歴史資料として極めて貴重なものであることを再認識しました。今後も資料の収集を進め、定期的に展示していこうと考えています。



企画展「寺子屋から学校へ」展示風景

古い民家の調査

檜原村郷土資料館

当館では、檜原村文化財専門委員会との協力により、古い歴史を持つ民家（明治以前より生業としての養蚕業の構造などを残すもの）の調査を4年間にわたって行い、約130戸の民家の調査を終えることができました。

檜原村の民家の歴史は、江戸時代初期に入母屋造りに始まります。慶長3年（1598）の慶長御水帳では村の戸数181戸とありますが、寛文7年（1667）の御水帳になると526戸をかぞえ、69年間で3倍に増えたことが分かります。

この526戸のうち、間口8間・奥行5間（5・8＝40坪といわれる）が主流で352戸、なかには間口14間のもの14戸、16間・18間のものも見受けられ、多くは大規模家屋であったようです。

これは、江戸時代初期に徳川幕府が開かれるとともに村が幕府の天領となり、口留番所や幕府直轄の山林（御林山）が5か所も置かれ、村全体がこれらの管理に携わるようになったことや、江戸の繁栄とともに生業（木材や製炭）活動が盛んになり、村民の生活に活気が生まれたことによるものと考えられます。また、戦国時代が終わり、落武者等格式のある者の帰農、土着の影響も大きいと思われます。いずれにせよ、簡素ではありますが、大きくて立派な構えの入母屋造りの家屋だったようです。

その後、江戸中期に生業としての養蚕が盛んになると、蚕室の増改築が始まり、入母屋を改造して通風・採光のために兜式屋根へ変わっていきます。明治・大正期には、屋根を切妻平屋根に改造し、杉皮葺に変更しはじめ、昭和前・中期には、多くがブリキ、トタンに変わっていきました。

昭和の後期には、建て替えとともに茅葺の屋根から銅板・鋼板の被覆屋根に変わるものが多くなってきました。

このように長い間、村民の住家として風雪に耐えてきた民家も、生活様式の変遷や維持管理の困難さから、内部構造の変化や建て替えにより減少し、やがては消滅するのではないかと危惧されるようになりました。そのような現状から、この調査を実施することとなったわけです。

調査は、平成10年度から実施し、4年間で約130戸の民家の調査を終えましたが、この調査に該当するものは110戸となりました。内兜式屋根で茅葺のもの3戸、茅葺に銅板・鋼板を被覆したもの4戸、入母屋造りで茅葺または杉皮葺のもの10戸、銅板・鋼板を被覆したもの23戸、屋根を改造したもので、間取り、構造の原形をとどめているもの70戸となっています。

以上調査したものは、現在まとめの作業中ですが、平成13年度中には終了し、歴史ある民家の調査表として間取り図を添付し、当館に保存し、後世に伝えていきたいと思います。

たてもの園での一年

江戸東京たてもの園

たてもの園からは本年度の事業報告と、「千と千尋の神隠し」公開による効果について記したいと思います。

本年度の事業報告

まず、本年度のたてもの園の主な事業についてですが、新規のものとしては二つあり、ともに子ども向けのものとして、7月に行った体験型の「家をつくろう！―セルフビルド―」と２月からの展示「昔の暮らしと道具」展です。

「家をつくろう！―セルフビルド―」は、竹や新聞紙、ベニヤ板、塩ビパイプなど身近にあるものを利用してドーム状の家を造るというもので、建築の構造に対する興味関心を促し、自分で何かを造る愉しみを感じてもらえることを目的としています。

「昔の暮らしと道具」展は、学校連携事業として火鉢や石臼の体験で来園している小学三年生の、昔の暮らしが題材になる3学期に合わせて、民家などで使っていた道具を展示したり、実際に使い方を体験させるというもので、ともに子どもたちには好評でした。

子ども向けとしては、昨年から始めた学校連携事業も大きく変わりました。昨年の火鉢・石臼の体験に、藍の育成と藍染の体験、大根の育成と大根干しを行い、単発ではなく時間をかけて物を育てるということにやっとたどり着けました。

新規事業以外には、昨年度から始めたたてもの園ツアーの回数を4回から9回に増やしたり、年に1回だったたてもの園セミナーを夏冬期に増やしたりと、ともに大幅に回数を増やし、参加していただける枠を広めました。それ以外の事業についても同様に行いました。

また、本年初の試みですが、両国の本館との共同企画ということで、「東京建築展」をたてもの園会場として同時開催しました。この東京建築展は近代の建築の歴史について明治から未来の建築像を概観するもので、たてもの園では明治から関東大震災までの資料を展示しました。

今回は概観をしたという域ににとどまってしまったという感も否めませんが、この展覧会を通して、近現代の東京の姿の重要性、また、関心の高さを実感しました。これ以外には、事業ではありませんが、本年度（2001年4月）より友の会が発足したことがあげられます。

「千と千尋の神隠し」公開による効果

次に、「千と千尋の神隠し」の公開によるたてもの園への波及効果についてですが、平成13年度のたてもの園の入園者数は、7月を境に例年を異常に上回る数値を示すようになりました。宮崎駿監督による映画「千と千尋の神隠し」封切り以後のことです。開館した年に24万人の入園者数であった当園ですが、その後は下降線を辿り、平均して例年16万人前後の入園者数となっていました。

ところが本年度については、開館時の記録に追いつけ・追い越せ状態となっています。これは、映画の舞台となった建物が当園の銭湯や文具店などを題材にし、映画の端々にたてもの園を連想させる絵が出て、パンフレットにもたてもの園の名が出ており、それを見た子どもたちが親を連れて駆けつけたというものです。

開園以来、たてもの園は、どちらかというと若い人が遊びに来る施設ではなく、高齢者の方々に懐かしさなどの点から喜ばれるといった感がありましたが、今年は非常に活気ある園内となっています。高齢者の入園者数は例年とさほど変わらず、若年齢層が大幅に伸びたことが入園者増につながっていると思われます。

それまでの子どもたちは、親に連れてこられて来園するため、早々に飽きてしまい、帰宅を迫る姿が園内で見られることがありましたが、映画を見て来た子どもたちは銭湯や文房具屋に行ったり、猿戸をくぐるなどして存分に楽しんでいました。

この状況で感じたのはメディアの力です。たてもの園ではここ数年来、新規復元建造物の建築が中断され、代わって事業の数を増やしてPRを行ってきました。これについてはそれなりの成果も上げていると思いますが、なかなか遠隔地にまでたてもの園を知ってもらうことはできませんでした。それが映画効果によって全国から問い合わせがありました。メディアをどう利用していくべきかを考えていく必要があると思いました。

奥多摩水と緑のふれあい館３周年記念コンサート

奥多摩水と緑のふれあい館

奥多摩 水源地ふれあいフェスティバル（鹿島踊）

当館は、奥多摩の豊かな自然や水源林の役割、ダムの仕組みと役割、水の大切さなどを紹介するとともに、奥多摩の郷土資料の展示をとおして地域の歴史・文化・民俗などの紹介も行い、東京都の水源地である奥多摩と水道を利用する都民の方々との交流を図ることを目的に、平成10年11月に開館し、昨年（平成13年）11月で3年が経過しました。

この間、当初見込みの年間入館者数20万人を大きく上回り、開館3年で82万人の方にご来館いただき、水道水源地のピーアールに、また、奥多摩の観光拠点として、或いは学習の場として幅広い年齢層の方々にご利用いただいております。

昨年は東京都水道水源林の経営100周年を記念して、多摩川上流の水道水源林をテーマに写真コンテストを実施しました（7～9月募集、入選30点）。また、前年に引き続き9月15日には、小河内地区に伝わる郷土芸能の中から小河内の鹿島踊とささら獅子舞を館内で上演、伝統文化による都市住民と山村住民との交流事業「奥多摩 水源地ふれあいフェスティバル」を実施しました。

11月23日から25日（3日間）には開館3周年を記念してミニコンサートを実施、都民交響楽団員によるマリンバ、金管五重奏、木管五重奏の室内楽を多くの来館者に鑑賞していただき、好評のうちに終演しました（期間中入館者数10,605人）。今後も観光スポットに位置する立地条件を生かしながら内容の充実に努めたいと思います。

奥多摩 水源地ふれあいフェスティバル（獅子舞）

「多摩の博物館さんぽ」アンケート報告

三博協企画委員会

三博協企画委員会では、2000年度に『多摩の博物館さんぽ』とその中の差込用として「多摩の博物館催し物あんない」を作成した（次ページ参照）。

配付方法等については、できあがった版下を加盟各館に送付し、印刷や配布等は加盟各館で行うこととした。そのため、どのように利用されているのかわからなかったので、下記のアンケート調査を行った。以下、その結果概要を報告するものである。

版下は、「鮎バージョン」と「猫のタマバージョン」（29ページ参照）の2種類の表紙を作成した。多くの方々の手にとっていただける図柄として、一般用の前者には三多摩地域を多摩川で有名な鮎に見立てて、その周りに加盟館の特色ある事物を配置した。子ども用の後者には、多摩と猫の名前によく使われるタマをひっかけてイラスト化した。この「猫のタマバージョン」については、すでに似たようなキャラクターが存在する等の理由によって、館によっては利用しなかったようであるが、すべての加盟館がこの版下のいずれかを利用して、1館あたり500部前後を印刷・配布している。

来館者の反応については、明らかに『多摩の博物館さんぽ』の効果だとわかりにくいこともあってか、数値としては表れてはいない。しかし配付状況をみると、8割以上の加盟各館で来館者が持ち帰っているととらえていることからも、多くの方々に利用されているようである。

この結果をもとに、今後内容をいっそう充実させ、各博物館や利用者がより利用しやすい紙面に改良していく予定である。

三博協企画委員会『多摩の博物館さんぽ』「多摩の博物館催し物あんない」アンケート

□に✓ 印を記入してください。

『多摩の博物館さんぽ』（以下『博物館さんぽ』と略す）についてお伺いします

Q1.『博物館さんぽ』は配付していただけましたでしょうか？
A. □配付した・する　□配付しない（理由＿＿＿＿＿＿）

Q2.『博物館さんぽ』の表紙は「鮎」と「猫のタマ」のどちらを配付しましたか？
A. □「鮎」　□「猫のタマ」　□二つとも　□オリジナルを作った

Q3.『博物館さんぽ』の内容・体裁についてお伺いします。
①表紙について　鮎　□親しみが持てる　□親しみが持てない　□堅い　□子供っぽい
□その他（＿＿＿＿＿＿）
猫のタマ　□親しみが持てる　□親しみが持てない　□堅い　□子供っぽい
□その他（＿＿＿＿＿＿）
②見開きの地図について　□見やすい　□見づらい　□堅い　□子供っぽい
□その他（＿＿＿＿＿＿）
③一覧表について　□見やすい　□見づらい　□項目が多い　□項目が少ない
□その他（＿＿＿＿＿＿）
不要な項目（＿＿＿＿＿＿）
追加したい項目（＿＿＿＿＿＿）

Q4.『博物館さんぽ』は何部印刷なさいましたか？
A. ＿＿＿＿＿＿部印刷した

Q5.『博物館さんぽ』はどのような形で配付なさいましたか？
A. □館内に置き自由に持ち帰ってもらう　□窓口などで希望者のみに配布
□その他（＿＿＿＿＿＿）

Q6.『博物館さんぽ』の記載内容の更新時期はいつ頃が良いでしょうか？
A. □毎年更新　□数年に一度更新（＿＿年に一度程度）　□更新の必要はない

Q7.『多摩の博物館さんぽ』はどのような方を対象とすべきでしょうか？（複数回答可）
A. □子供向け　□一般（大人）向け　□強い関心を持っている人向け

「多摩の博物館催し物あんない」（以下「催し物案内」と略す）についてお伺いします。

Q8.「催し物あんない」は配付していただけましたでしょうか？
A. □配付した・する　□配付しない（理由＿＿＿＿＿＿）

Q9. 今回の「催し物あんない」の発行時期（4月初旬）は適当でしたでしょうか？
A. □早い　□適当　□遅い
理由（＿＿＿＿＿＿）

Q10.「催し物あんない」の発行回数は何回ぐらいが良いでしょうか？
A. □年間1回　□年間2回　□その他（＿＿＿＿＿＿）
適当な発行時期（＿＿＿＿月頃）

『多摩の博物館さんぽ』と「多摩の博物館催し物あんない」の両方についてお伺いします。

Q11.『博物館さんぽ』と「催し物あんない」の配付状況はいかがでしょうか？
A. □たくさん出る　□まあまあ　□あまり出ない

Q12.『博物館さんぽ』と「催し物あんない」について来館者の反応はいかがでしたでしょうか？　該当する項目に✓を入れてください（複数回答可）。
A. □『博物館さんぽ』や「催し物あんない」に関する問い合わせがあった。
□『博物館さんぽ』や「催し物あんない」を見て来館した人があった。
□特に反応はなかった。
□その他（＿＿＿＿＿＿）

Q13.『博物館さんぽ』と「催し物あんない」の印刷方法は、次のどちらがよろしいでしょうか？
A. □各館に原稿を配付し各館が印刷（現行通り）　□三博協で一括して印刷

Q14. 原稿の配付方法はどのような方法がよろしいでしょうか？
A. □原下支給（現行通り）　□データ（フロッピー）渡し　□その他（＿＿＿＿＿＿）

Q15.『博物館さんぽ』と「催し物あんない」について、ご意見やご要望がありましたら、ご記入ください。内容や編集方法など、どのようなことでも結構です。

…ありがとうございました。

貴館名＿＿＿＿＿＿　ご担当者名＿＿＿＿＿＿

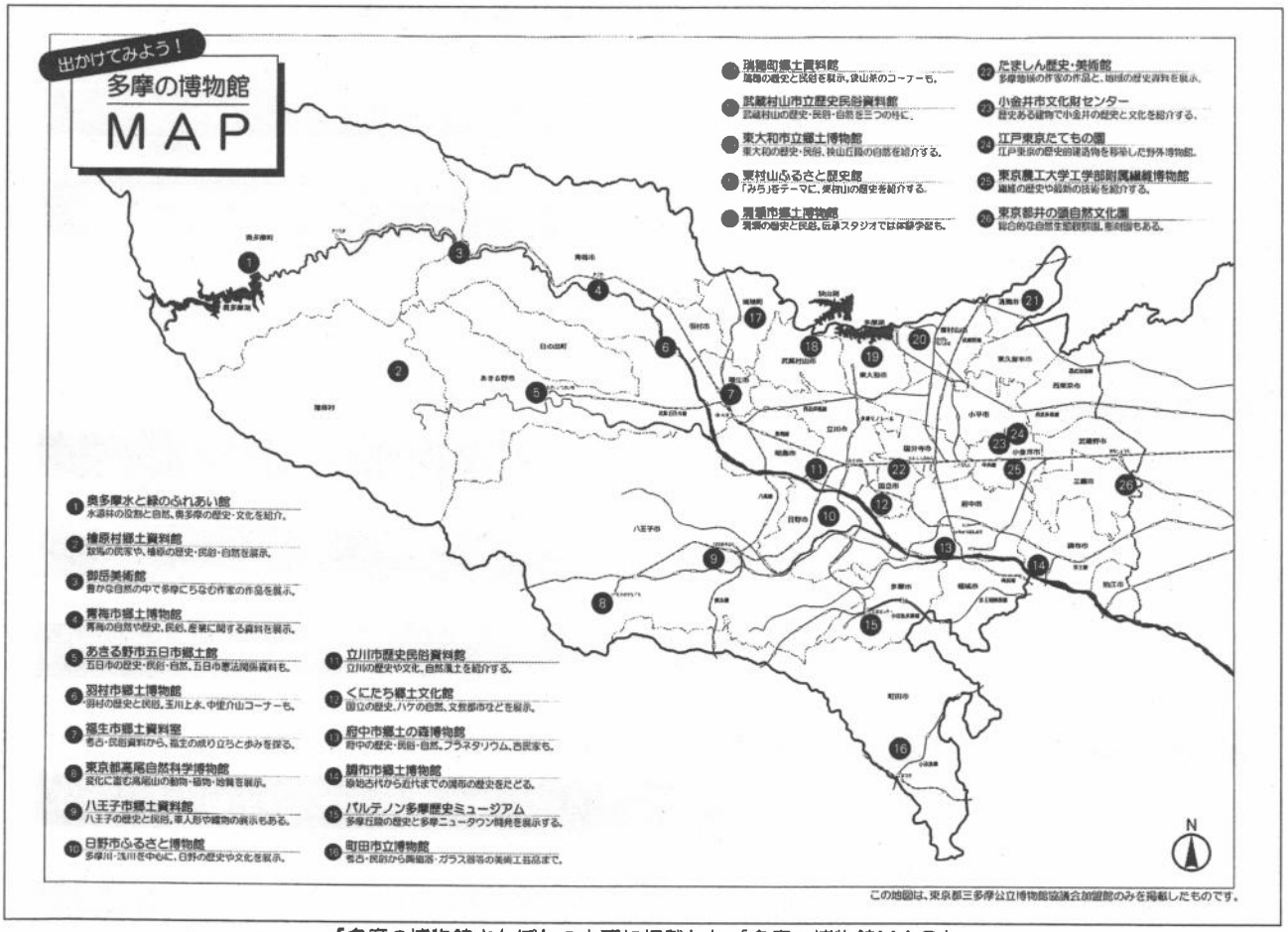
加盟各館に配布したアンケート

＜『多摩の博物館さんぽ』と「多摩の博物館催し物あんない」＞

表紙（鮎バージョン）

表紙（猫のタマバージョン）

「多摩の博物館催し物あんない」



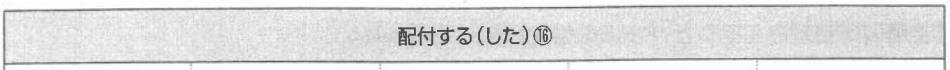
『多摩の博物館さんぽ』の中面に掲載した「多摩の博物館ＭＡＰ」

＜集計結果＞

グラフ内の丸数字は館数／全16館

■「多摩の博物館さんぽ」について

Q1.配付の有無



Q2.配付した種類

Q3.「博物館さんぽ」の内容・体裁について

①表紙　鮎

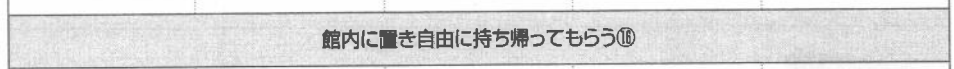
猫のタマ

②見開きの地図

③一覧表

Q4.印刷部数

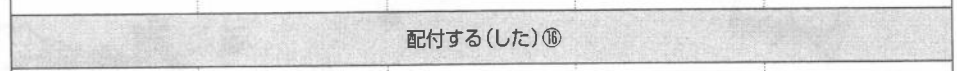
Q5.配付方法



Q6.記載内容の更新時期

Q7.対象（複数回答可）

Q8.配付の有無



■「多摩の博物館催し物あんない」について

Q9.発行時期

Q10.発行回数

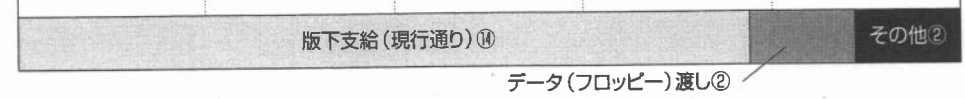
Q11.配付状況

■「多摩の博物館さんぽ」と「多摩の博物館催し物あんない」の両方について

Q12.来館者の反応

Q13.印刷方法

Q14.原稿の配付方法



<各館からのコメント>

Q3-① 鮎について

・鮎に見えない。(立川)
・デザインは工夫されているが、それが一般利用者へ伝わるか。(府中)
・多摩川・秋川の釣りのイメージで。(檜原)

Q3-① タマについて

・ナムコナンジャタウンのキャラクターと似ている。(武蔵村山)

Q3-② 見開き地図について

・大きく扱い過ぎ。スペースがもったいないと感じる。(府中)
・館最寄駅を入れた方が良い。(国立)

Q3-③ 一覧表について

・高齢の方には、字が小さすぎるかも。スペース上仕方ありませんが。(多摩)
・追加したい項目：URL、郵便番号、FAX番号(府中)
・字が小さい。(檜原)
・字が小さい→高齢者には読めない。(東大和)
・活字が小さい(奥多摩)

Q4 印刷部数

・当初30随時追加(福生)

Q6 「博物館さんぽ」の更新時期について

・数年に一度(立川)
・5年に一度程度(福生)
・3年に一度程度(清瀬・羽村・奥多摩)
・2年に一度程度(檜原)
・更新の必要はないが、必要に応じて(八王子)
・必要に応じて毎年更新(国立)
・必要に応じて(瑞穂)

Q9 今回の「催し物案内」の発行

・早い。3月末までは新年度事業計画など未確定のものが多い。6月頃確定する。(国立)
・早い。当館の年次計画の決定に間に合わないため。(立川)
・適当。その年度に計画されている展示会タイトルや日程を紹介するのに適している。(府中)
・遅い。新年度の計画をのせるなら、できるだけ3月中の発行に。(高尾)

Q10 催し物案内の発行回数

・年1回：4月頃。(檜原)
・年1回：5月頃。(立川)
・年2回：4月と10月。催し物に変更があった場合、それを早く知らせるため。(町田)
・年2回：4月～9月、10月～3月。(国立)
・年2回：3、9月頃(高尾)
・年2回：4、9月頃(八王子・奥多摩)
・年2回：5、11月頃(東大和)
・年4回：4、7、10、1月頃。年4回程度なら展示会の詳しい紹介記事が掲載可。4月号はQ9の回答内容とし、詳しい内容は7月以降で。(府中)

Q12 反応について

・アンケートをした訳ではないので配付の効果は分かりません。(府中)
・来館者のうちの大半が「博物館さんぽ」を持って帰るので、配付率は高い。(八王子)

Q14 原稿の配付方法

・今後分担でやるようになったことを考えると、あんまり手間をかけないようにした方が良い。(武蔵村山)

Q15 意見・要望

・「博物館さんぽ」は、更新の必要はないが、加盟館の増減、住所変更により、必要に応じて見直した方が良いと思います。また、表紙のデザインについても何年に一回かは更新してみてはいかがでしょうか？(八王子)
・より見やすくなる形で、徐々に充実していければいいと思います。(多摩)
・今までなかったことであり、多摩の博物館が全て一目瞭然で見れて入館者のサービスとしてはよいことと思う。今後も続けて欲しい。(町田)
・掲載できる情報量に限りがあるため、各施設が開設しているホームページアドレスを記載すれば、詳細な情報を得たい利用者のサービスに継がると思う。細かい情報提供を心がけたく、Q9・10の回答のような対応が望ましい。配付を始めてから間もないパンフレットなので利用者の声を聞き入れながらより良い宣伝媒体として長い期間をかけて反応を探る必要があると思う。(府中)
・三博協の連携事業として一番大事な事業だったと思います。企画委員の皆様、ご苦労様でした。(武蔵村山)
・一覧表や催し物案内は字が小さく見づらい、一覧表については、TELを見開き地図に移動するとか住所・開館時間を抜くなどして、情報を整理してみたらもう少し見やすくなるのでは。(東大和)

東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩10分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	0426-22-8939	京王線「京王八王子駅」またはJR中央線「八王子駅」からバス「市民会館前」下車徒歩1分
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	JR南武線「府中本町駅」「分倍河原駅」下車徒歩20分
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩12分
調布市郷土資料館	調布市小島町3-26-2	0424-81-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-557-5614	八高線「箱根ヶ崎駅」下車徒歩18分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「横田」下車徒歩10分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」下車徒歩20分
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	0424-93-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩5分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行きか藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市ふるさと博物館	日野市神明4-16-1	042-583-5100	JR中央線「日野駅」下車徒歩12分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」下車徒歩25分、「東小金井駅」下車徒歩20分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から長円寺行きバス「八幡神社」下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学工学部附属繊維博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
東京都高尾自然科学博物館	八王子市高尾町2436	0426-61-0305	京王高尾線「高尾山口駅」下車徒歩4分
東京都井の頭自然文化園	武蔵野市御殿山1-17-6	0422-46-1100	JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」下車徒歩10分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からバス7分「小金井公園西口」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩20分

編集後記

今号の編集にあたって編集委員会で話し合った結果、「もう少し内容を詳しく書ける機関誌とした方がよいのではないか」という意見が多かったため、発行部数を抑える一方でページ数を増やし、1館1ページという形に変更して内容拡充に努めました。

また、その対応が緊急の課題となっている「『総合的な学習の時間』への取り組み」を特集テーマとしたところ、館の活動内容とあわせて多くの事例が寄せられました。編集委員一同お礼申し上げます。

このささやかな試みをきっかけとして、今後の博物館活動をよりいっそう活発にしていただければ幸いです。

ミュージアム多摩 No.23

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
会長　くにたち郷土文化館
〒186-0011 東京都国立市谷保6231
電話　042-576-0211

編集委員：東村山ふるさと歴史館
くにたち郷土文化館
東大和市立郷土博物館
パルテノン多摩歴史ミュージアム